矢田借屋古墳群

－個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０００.３

石川県小松市教育委員会

例　言

1．本書は、個人住宅建設に伴って実施した矢田借屋９・10・11・12号墳の発掘調査報告書である。
2．詳細分布調査、発掘調査及び出土品整理は、小松市教育委員会が主体となって実施した。
3．詳細分布調査、発掘調査、遺物整理、報告書作成に係る経費は国庫補助事業として行った。
4．発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。なお詳細分布調査では　樫田誠、発掘調査では樫田　誠、望月精司の指導と協力を得た。

《調 査 地》　石川県小松市月津町ト17番地（外19筆）
《調査期間》　詳細分布調査　平成10年３月２日～６日
　　発掘調査　平成10年10月13日～平成11年１月28日
《調査面積》　詳細分布調査　2,474㎡
　　発掘調査　350㎡
《調査担当》　詳細分布調査　川畑謙二　大橋由美子
　　発掘調査　宮下幸夫　大橋由美子

5．出土品整理は出土品整理臨時作業員を雇用し、遺物実測・製図・報告書図版作成は、国本久美子　山口美子　坂下義視　福海貴子　岩本信一　向出泰央　松本敦子　松山容子の協力を得て、望月精司の指導・教示のもとに大橋が担当した。主体部遺物並びに埴輪に関しては樫田　誠の指導を得た。
7．報告書の編集は望月精司の指導を受け大橋が担当し、執筆は第１章を福海貴子、第２章を宮下幸夫、第３章を大橋が担当した。
8．写真撮影は、遺構を宮下、大橋が、遺物を橋本正博、大橋が行った。
9．本書で示す方位はすべて真北であり、水平基準は海抜高（m）で示してある。尚、第３図の調査対象区域位置図には、小松市発行2,500分の１国土基本図（平成２年修正「矢田野」）を引用した。
10．本調査において出土した遺物を含め、遺構・遺物の実測図、写真などの資料は、小松市教育委員会が保管している。
11．報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体からご協力とご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい。（敬称略　50音訓）
穴澤義功　川畑 誠　北野博司　木立雅朗　菱田哲郎　石川県埋蔵文化財センター

目　次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　調査の経緯と経過 …… 5
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 5
　第２節　発掘調査の経過 …… 5

第３章　遺構と遺物 …… 7
　第１節　調査区の概要 …… 7
　第２節　借屋９号墳の調査 …… 9
　第３節　借屋10号墳の調査 …… 19
　第４節　借屋11号墳の調査 …… 30
　第５節　借屋12号墳の調査 …… 37
　第６節　まとめ …… 38

写真図版

第１章 遺跡の位置と環境

１．月津台地と遺跡の立地

矢田借屋古墳群は、月津町地内に所在する古墳時代後期の古墳群である。昭和30年改称以前この地は、江沼郡月津村字矢田ム11番地借屋と称されていた。

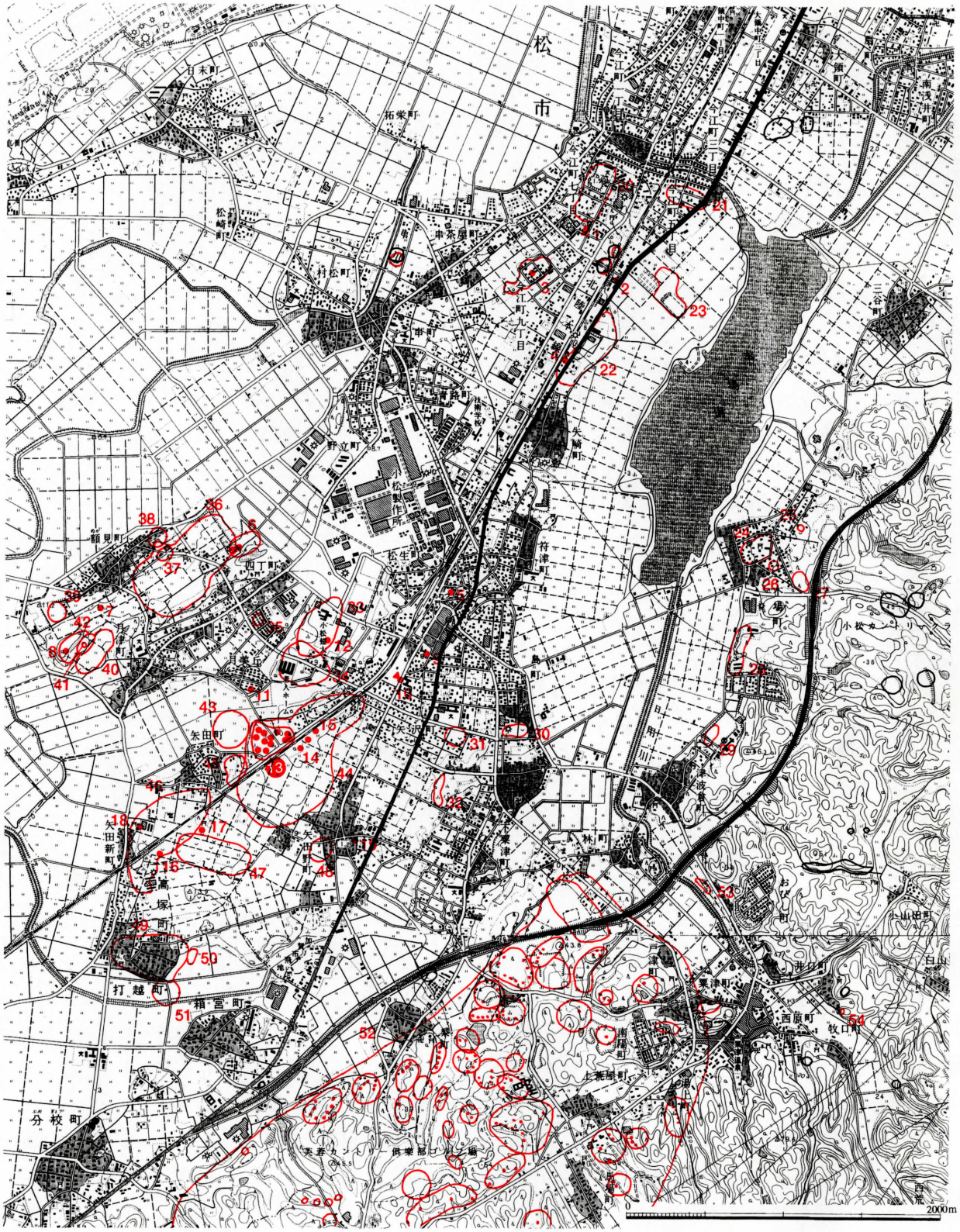
さて、矢田借屋古墳群が所在する小松市南部地域は、地形的特徴において概ね３区分することができ、遺跡分布はこの地理的条件に適応するかたちで展開している。まず、白山連峰の前山地帯から続く標高20～50mの低丘陵地には、戸津・二ツ梨・那谷金比羅山古窯跡などをはじめとした日本海側有数の規模を誇る南加賀古窯群がある。また、木場・今江・柴山潟に囲まれた標高10m～20mの洪積台地には、縄文時代から中世に至る集落跡や、本古墳群を含む古墳時代後期の古墳・集落跡が見られる。そして残る地域は、加賀三湖の各々をとりまいて形成している潟埋積平野で、水田地帯となっている。

ここで、本古墳群が所在する月津台地を詳しく見てみたい。

月津台地は、近・現代の開発が著しく、土採取や谷の埋め立て、農地開発等によって、現在ではほとんど旧地形の把握が困難な状況にある。そこで、陸地測量部発行で、明治42年測量の５万分の１の測量図をもとに、往時の地形を読みとったのが第２図である。江沼丘陵の前縁部には、木場潟に注ぐ粟津川と、柴山潟に注ぐ動橋川の支流那谷川との開析によって分断された低丘陵が横たわっている。柴山潟・今江潟に面する北西縁辺部は標高が高く、複数の小頂部をもつ起伏の激しい地形となっており、他は、比較的平坦な地形である。また打越町から下粟津町にむかって長く延びる谷は、丘陵前縁の台地部から一旦区切るかたちとなっており、一応これを月津台地の南東端の境としておきたい。月津台地はそのほぼ中央部で、馬渡川による開析谷が粟津駅に向かって深く入り込み、木場潟側からの開析谷とともに台地を強くくびれさせて、ちょうど粟津駅を境に北西半部と南東半部に台地を区分している。本古墳群は、粟津駅から南西へ下った谷の左岸に位置し、馬渡川の谷中央部に近い南側台地中縁辺にあたる。

２．周辺の遺跡

中・南部地域の本遺跡周辺を中心に遺跡展開のあり方を追ってみたい。この地域で確認されている最古の資料は、念仏林遺跡[注1]（33）出土の石槍で、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての所産であるが、単独の検出状態である。集落としての明確な展開がみられるのは、三湖が入江の状態にあったと考えられる縄文時代前期で、木場潟東南岸丘陵縁の大谷山貝塚（29）など、貝塚を伴った集落が、潟に面して営まれているものの、この時期の遺跡分布は未だよく把握されていない。縄文時代中期になると、月津台地上を舞台に多くの集落が営まれるようになる。念仏林遺跡や、念仏林南遺跡[注2]（34）、茶臼山A遺跡（42）のほか、この時期の遺物は台地上の他遺跡でも複合されるかたちで採取されている。後・晩期になると、遺跡の分布は丘陵上に中心を移し、台地上からしだいに姿を消してゆく。次に集落が展開するのは、弥生時代末～古墳時代初頭の月影式に属するもので、念仏林南遺跡、額見町西遺跡（39）では良好な竪穴住居跡を検出しており、また念仏林南遺跡では、県内の出土例も少ない山陰形甑が出土している。この時期以降、古墳時代を通して遺跡数は増加し、これらが複合して大規模な遺跡が台地上を占有している。特に、後期の集落では、月津と矢田野とを分断して柴山潟に通じる大きな谷平野の周囲に、念仏林南遺跡・矢田野遺跡（44）・矢田B遺跡（45）・刀何理遺跡（47）などが群集し、概期の古墳分布（次項）との重なりをみせている。昭和59・60年に調査された念仏林南遺跡では、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡が17棟検出されている。内容的には、際だった建物や遺物はなく、さほど広くない舌状の台地



1～19表1参照　20御幸塚遺跡（中世）　21五郎座貝塚（縄文）　22薬師遺跡　23今江五丁目遺跡（縄文・弥生・奈良）　24池田城跡（中世）　25木場温泉遺跡（縄文）　26木場C遺跡（弥生）　27木場B遺跡（平安・中世）　28木場古墳群（古墳）　29下各山貝塚（縄文）　30島遺跡（弥生～奈良）　31島B遺跡（奈良・平安）　32下粟津横穴（古墳）　33念仏林遺跡（縄文）　34念仏林南遺跡（縄文・弥生・古墳）　35月津新遺跡（縄文）　36額見町遺跡（縄文～中世）　37額見神社前A遺跡（縄文）　38額見神社前B遺跡（弥生～古墳）　39額見町西遺跡（弥生～飛鳥）　40茶臼山B遺跡（縄文）　41茶臼山祭祀遺跡（奈良）　42茶臼山A遺跡（不祥）　43矢田A遺跡（縄文）44矢田野遺跡（古墳）　45矢田B遺跡（古墳）　46矢田新遺跡（奈良）　47刀何理遺跡（古墳）　48矢田野神社前遺跡（平安）　49打越城跡（安土桃山）　50打越B遺跡（弥生）　51打越A遺跡（縄文）　52南加賀古窯跡・製鉄跡群（古墳～中世）　53井口遺跡（奈良・平安）　54牧口中世墓地（鎌倉中期～室町）

第１図　周辺の遺跡

を地形単位で居住地として占有した、村落形態の一典型例ということができる。本遺跡は、先に触れたように、縄文中期や弥生末、さらには古墳前・中期集落が重複しており、周辺遺跡もこれと同様な展開をみせていることが予想される。飛鳥・奈良時代になると木場潟西岸台地上の薬師遺跡（22）・島遺跡（30）、柴山潟に面した矢田新遺跡（46）、古代末までの複合遺跡である額見町遺跡[注3]（36）等の存在が知られている。特筆すべきこととして、額見町遺跡・額見町西遺跡[注4]では７Ｃ全般にわたって、Ｌ字形カマドをもつ竪穴住居いわゆるオンドル状遺構や、鍛冶炉が検出されている。これらのことから額見町遺跡が渡来系技術者の存在を伺わせる重要な遺跡であるといえよう。

以上、集落の動向を述べてきた。

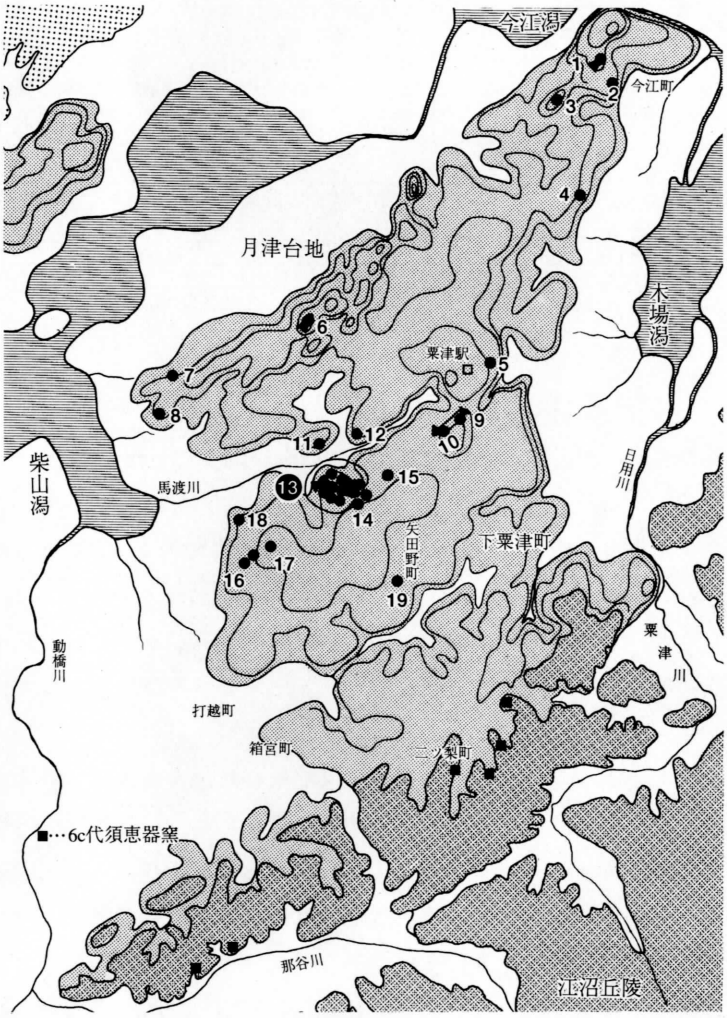
次に江沼丘陵に展開する生産遺跡について簡単に触れることにする。

南加賀古窯跡群[注5]（52）は、須恵器・埴輪・土師器・瓷器系窯跡を総称したもので、県内最大の規模をもつ。その数は、現在確認されているもので、須恵器窯跡195基、土師器窯跡約60基、瓷器系中世陶器窯跡（加賀古窯・加賀焼）39基を数える。中世陶への転換期に若干のブランクはあるものの、須恵器生産の開始から約900年の間、連綿と生産を行っている。須恵器生産の開始は、５世紀末ないし６世紀初頭と考えられ、二ツ梨・戸津町付近の、月津台地とのつながりをもつ丘陵部にまず営まれることが注目される。この中には、埴輪併焼窯の二ツ梨豆岡山（殿様池）古窯跡が含まれており、県内唯一確認されている埴輪窯となっている。

３．周辺の古墳分布

月津台地は、近・現代において、その平坦な地形を格好の住・農適地として開かれた部分が多かったためか、多くの古墳がその姿を消した。現在知見にのぼっている古墳のほとんどは開発によって消滅しており、その内容等は、能美・江沼両郡誌などにおける、破壊時あるいは盗掘時の伝聞の記録に負うところが大きい。台地上では、いままでのところ後期古墳以外の展開は確認されていない。

月津台地の古墳の分布はおおまかに３つのグループに分けることが可能である。一つは、台地の最北端のいわゆる三湖台と称する高台にある御幸塚古墳（1）や土百古墳（2）、狐山古墳（3）で、切石積横穴式石室の矢崎B古墳（4）を含めて、一応まとまりをなしている。次にあげられるのが、柴山潟に面する台地の北東縁沿いに存する臼のほぞ古墳



第２図　月津台地の古墳分布

(6) と左門殿古墳 (7)、茶臼山古墳 (8) である。最後の一つは柴山潟に通ずる馬渡川の谷平野で、最も古墳が集中する地区である。左岸部の西端には、家形石棺を持つ狐森古墳 (17)、横穴式石室内に家形石棺をもつ矢田新丸山古墳 (18) が盟主的な内容を示して存在しているが、墳丘自体は、中規模の円墳と考えられる。谷の奥部の粟津駅方向に進むと、矢田野エジリ古墳[注6] (10) と、蓑輪塚古墳 (9) が隣接して存在し、蓑輪塚古墳の北東部には符津石山古墳[注7] (5) がある。右岸には念仏塚古墳 (11)、念仏林古墳 (12)、左岸には、無名古墳群 (16)、百人塚古墳 (15)、矢田野古墳群 (14)、30m級の前方後円墳2基を含む本古墳群 (13) など、小規模円墳を主体とした濃密な分布状態を示し、これらは、当概期集落分布とも重なりをみせる。

表1　月津台地古墳一覧（番号は第1図共通）

No	名称	所在地	墳形	規模 m	埋葬施設	備考
1	御幸塚古墳	今江町	前方後円	全長30	不明	後円部先端削取、指輪・須恵器・直刀
2	土百古墳	〃	円	径10	不明	消滅、管玉
3	狐山古墳	〃	円	——	切石組合い石棺？	消滅
4	矢崎B古墳	矢崎町	円	——	切石積横穴式石室	消滅、馬具・金環他
5	符津石山古墳	符津町	円	——	切石積横穴式石室	消滅、須恵器・直刀・金環他
6	臼のほぞ古墳	串町	前方後円	全長52	不明	主体部・墳頂部破壊
7	左衛門殿古墳	額見町	円	——	不明	大部分削平
8	茶臼山古墳	月津町	円	径28	不明	主体部破壊、二段築成、須恵器
9	蓑輪塚古墳	島町	前方後円	全長40	箱形粘土棺（粘土室）	消滅、須恵器・玉他
10	矢田野エジリ古墳	矢田野町	前方後円	30	不明	消滅（地下に周溝残）、埴輪・須恵器
11	念仏塚古墳	月見丘町	円	——	不明	消滅
12	念仏林古墳	月津町	円	——	箱形粘土棺（粘土室）	消滅、須恵器・直刀・鉄斧・金環他
13	**借屋古墳群** 1号墳～8号墳	矢田町	円6基 前方後円 2基	2号最大径9 4号最大径13 7号全長35 8号全長30	2・4号　箱形粘土棺（粘土室） 7号積形粘土棺（粘土礫壁室？） 8号礫棺（切石積横穴式石室？）	消滅、1・3号ー須恵器、 2号ー須恵器・直刀他 4号ー須恵器・埴輪・玉類 7号ー須恵器・埴輪・直刀・刀子の柄部・鉄鏃等 8号ー須恵器・埴輪・銀環
14	矢田野古墳群	矢田野町	円2基	——	不明	墳丘破損
15	百人塚古墳	矢田町	円	——	不明	消滅
16	無名古墳群	〃	円10基？	——	箱形粘土棺（粘土室）？	消滅
17	狐森古墳	〃	円	——	家形石棺	消滅
18	矢田新丸山古墳	矢田新町	円	——	横穴式石室、家形石棺	墳丘裾一部・主体部破壊
19	中村古墳	矢田野町	円	——	切石積横穴式石室	消滅、須恵器・金環

4．借屋古墳群の概要

最後に本報告である、借屋古墳群の概要に少し触れたい。

現在、借屋古墳群は本報告を含めて、13基確認されており、そのうちの1～6号墳が円墳、7・8号墳が前方後円墳とされている。9～12号墳が本報告で確認され、13号墳は現状況により周溝が存在することがわかっている。位置は第3図を参照されたい。

このうち2・4号墳の調査[注8]が、昭和25年8月、石川考古学研究会幹事上野与一氏の指導のもと、小松高校地歴クラブにより行われている。2・4号墳は楕円をなす円墳で、埋葬施設は念仏林古墳同様、粘土室（箱形粘土棺）である。4号墳の主体部からは、高坏、瑕、坏等が2列に並べられて出土。また墳丘には葺石が存在し、円筒及び形象埴輪の破片が出土している。その後、7・8号墳の調査[注9]が2・4号墳同様に行われている。7号墳は前方部の大半、後円部の1/3が破壊されており、残存する部分に存在する主体部も盗掘を受けている。主体部は積形粘土棺で、出土遺物は、須恵器、紅がら、直刀、鉄鏃等、円筒埴輪が確認されている。8号墳は小さな台地の浸蝕残丘を利用した前方後円墳であり、前方部の北東面が道路補修の土砂採取により欠損。主体部は盗掘を受けており、銀環のみ発見された。埋葬施設は礫棺（礫床粘土棺）とされている。出土遺物は、須恵器、円筒埴輪が確認されている。

しかし、現状で完存する古墳はなく、1～8号墳は消滅、9～13号墳も一部残存するのみである。

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至るまでの経緯

市内浜田町在住の太田光彦氏は、月津町ト17番地（外19筆）に土地を購入した。当該地に住宅建設を計画し、平成９年10月22日付けで埋蔵文化財の取り扱いについて協議書を提出された。

小松市教育委員会は当該地が周知の矢田野遺跡に含まれることより、その旨と事前に詳細分布調査を実施し埋蔵文化財の状況等の確認が必要との回答を、同年11月５日に行った。

詳細分布調査依頼を受け、平成10年３月２日より６日まで国庫補助事業として同調査を実施した。

予定地に任意に５本の試掘溝を設定し、人力により掘り下げ、埋蔵文化財の状況確認調査を行った。その結果、いずれの試掘溝からも遺物包含層が確認され、古墳の周溝と考えられる溝状の落ち込みが確認された。遺物は、円筒埴輪や６世紀代の須恵器が出土した。

よって、予定地には当該期の古墳が存在しているものと考えられ、隣接する６世紀代の借屋古墳群に含まれるものと想定された。

上記詳細分布調査の結果を事業者に平成10年３月18日付けで報告した。

その後、小松市教育委員会と事業者は、確認された埋蔵文化財の保存等の協議を行った。建設される住宅は木造平屋建ての計画であるが、現地は杉などの大木があり伐根等により埋蔵文化財に影響があるので、住宅及び納屋の建物部分の発掘調査を行い、他は現状保存とすることとなった。

平成10年９月10日、事業者より文化財保護法第57条の２第１項に基づく発掘の届出が文化庁長官宛に提出され、それに対して同25日付けで石川県教育委員会より事業者に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知がなされた。

また、同じく９月10日に発掘調査の依頼が市教育長に提出され、市教育委員会は発掘調査を実施する旨を10月12日に回答した。

発掘調査は、平成10年度の国庫補助を受け市内遺跡調査事業として、平成10年10月13日から平成11年１月28日まで実施した。

同10月26日、市教育委員会は文化庁長官宛に文化財保護法第98条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。

第２節　発掘調査の経過

調査は、平成10年10月13日より開始した。まず調査区の範囲設定と並行して事業者による立木の伐採後の後片付け作業を14日まで行った。その後、19日・20日と重機により表土除去を行い、仮設調査事務所の建て上げを24日までに行った。

10月26日から本調査を開始。まず調査区内にグリッドの杭打ちを行い、伐根作業及び遺構検出作業を並行して行った。調査区は２カ所に分かれていて、市道側（西）をＡ地区、北東奥をＢ地区と呼称した。

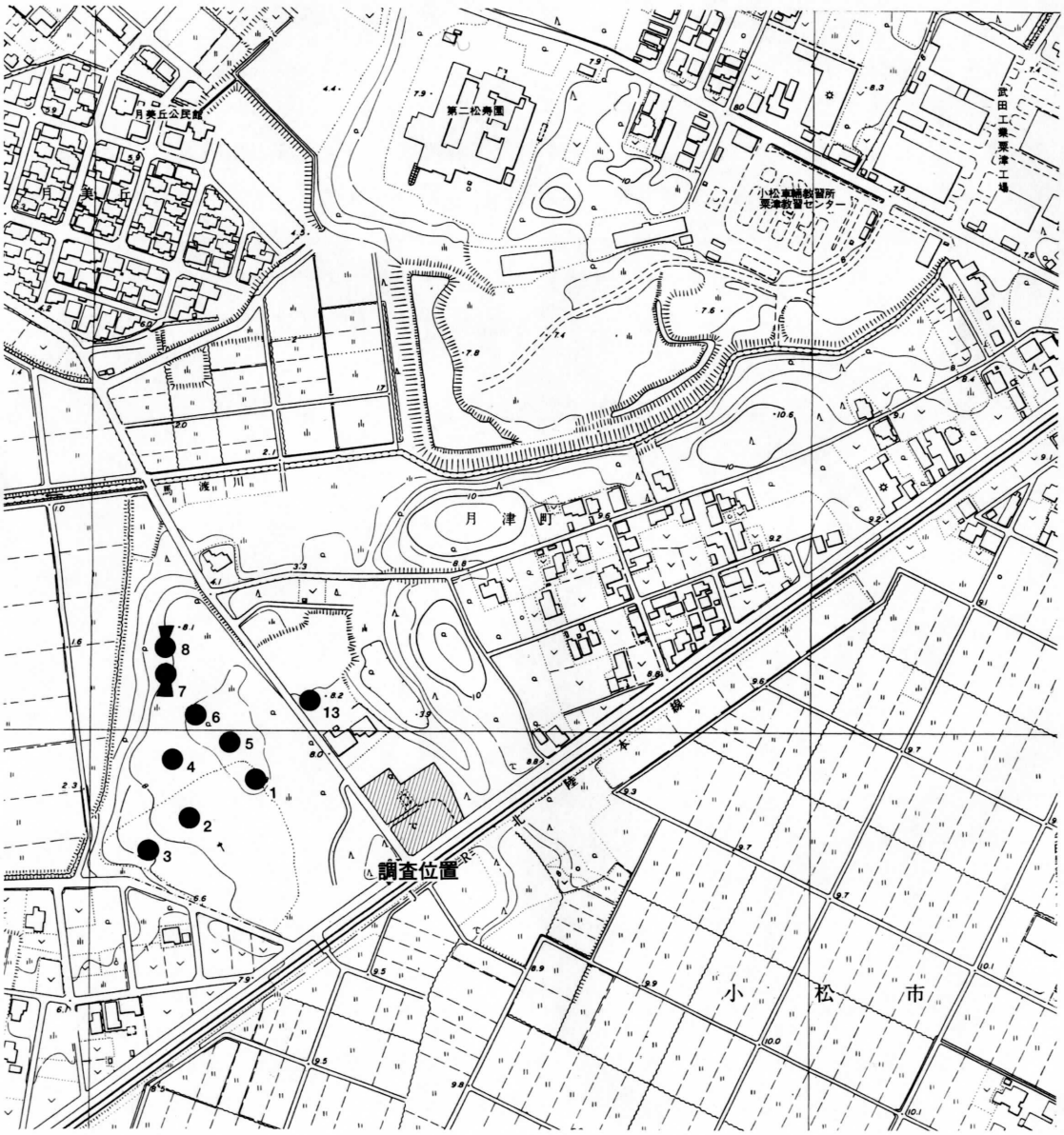
11月５日までにＡ地区で１基（１号墳と呼称）、Ｂ地区で２基（２・３号墳と呼称）の古墳の周溝プランが検出され、埴輪片も出土した。Ａ地区は、植木の植え込み・抜き取り等で攪乱が激しい。各古墳ともマウンドは削平されていた。６日より各古墳の周溝にセクションベルトを設定し、掘り下げを開始した。また、Ａ地区の南西部で粘土が検出されたのでこの部分の拡張を行い10日に終了。精査した結果、攪乱は受けていたが主体部と判明した。

1号墳の調査は、周溝の掘り下げ、土層セクション図取り、セクションベルト外し、遺物取り上げ等の作業を行って、主体部以外の調査を26日までに終了した。

2・3号墳の調査は、周溝の掘り下げ、土層セクション図取り、セクションベルト外し、遺物取り上げ等の作業を12月14日までに終了した。

3号墳では主体部の一部が検出され、その精査等と並行して1～3号墳の平面図・コンタ図の作成を25日までに終了した。

1号墳の主体部の調査は、上記各墳の調査と並行して行った。12月3日には小玉が出土した。12月26日より平成11年1月5日まで中断し、6日より再開した。11日には鉄器片（鏃？）が出土した。土層セクション図取り、遺物取り上げ、平面図作成、断ち割り等の作業を18日までに終了し、19日に撤収した。後、28日にA地区の埋め戻しを重機により行い、この日をもって発掘調査は完了した。



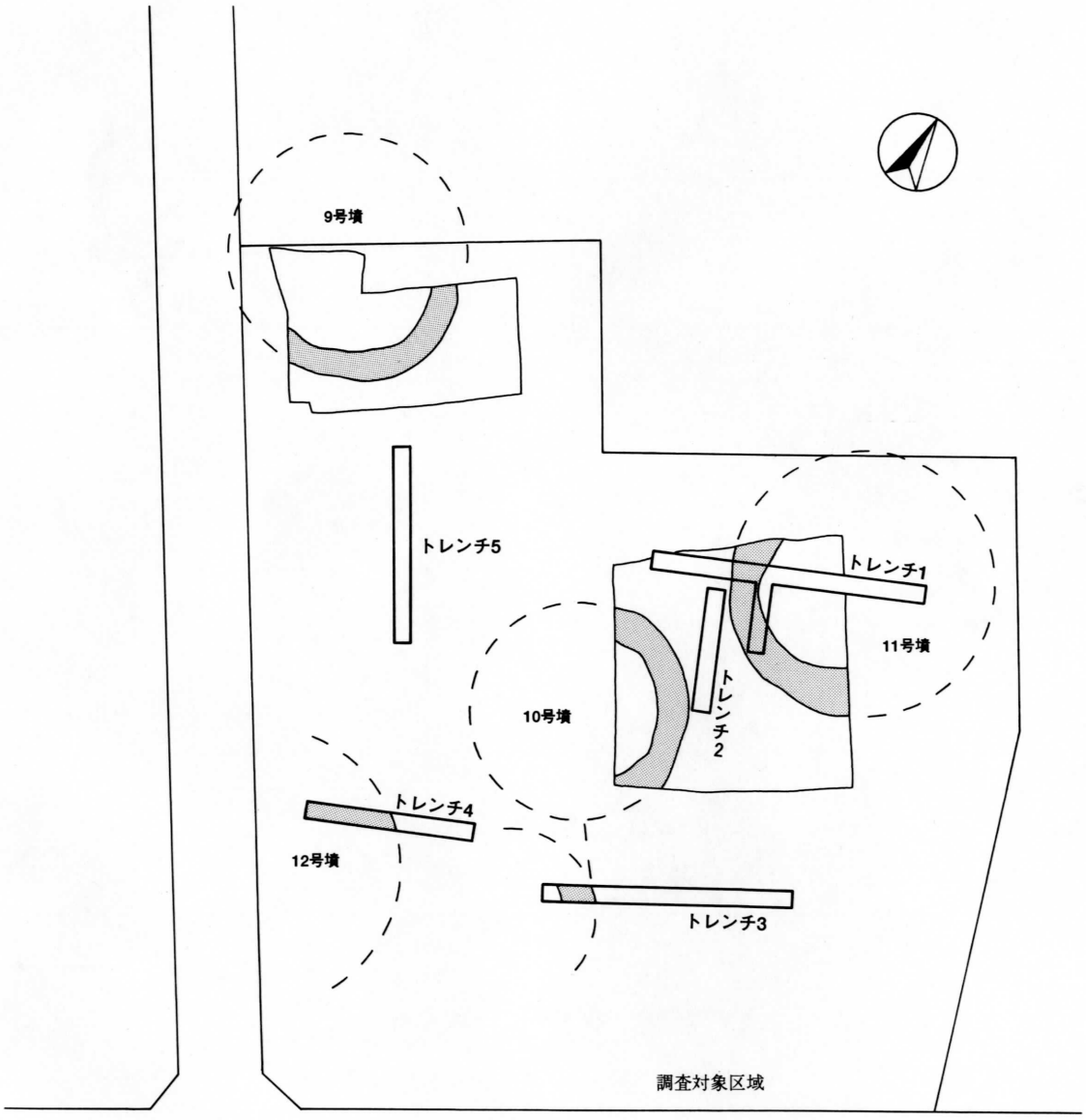
第3図　調査対象区位置図（S＝1/5000）

第３章　遺構と遺物

第１節　調査区の概要

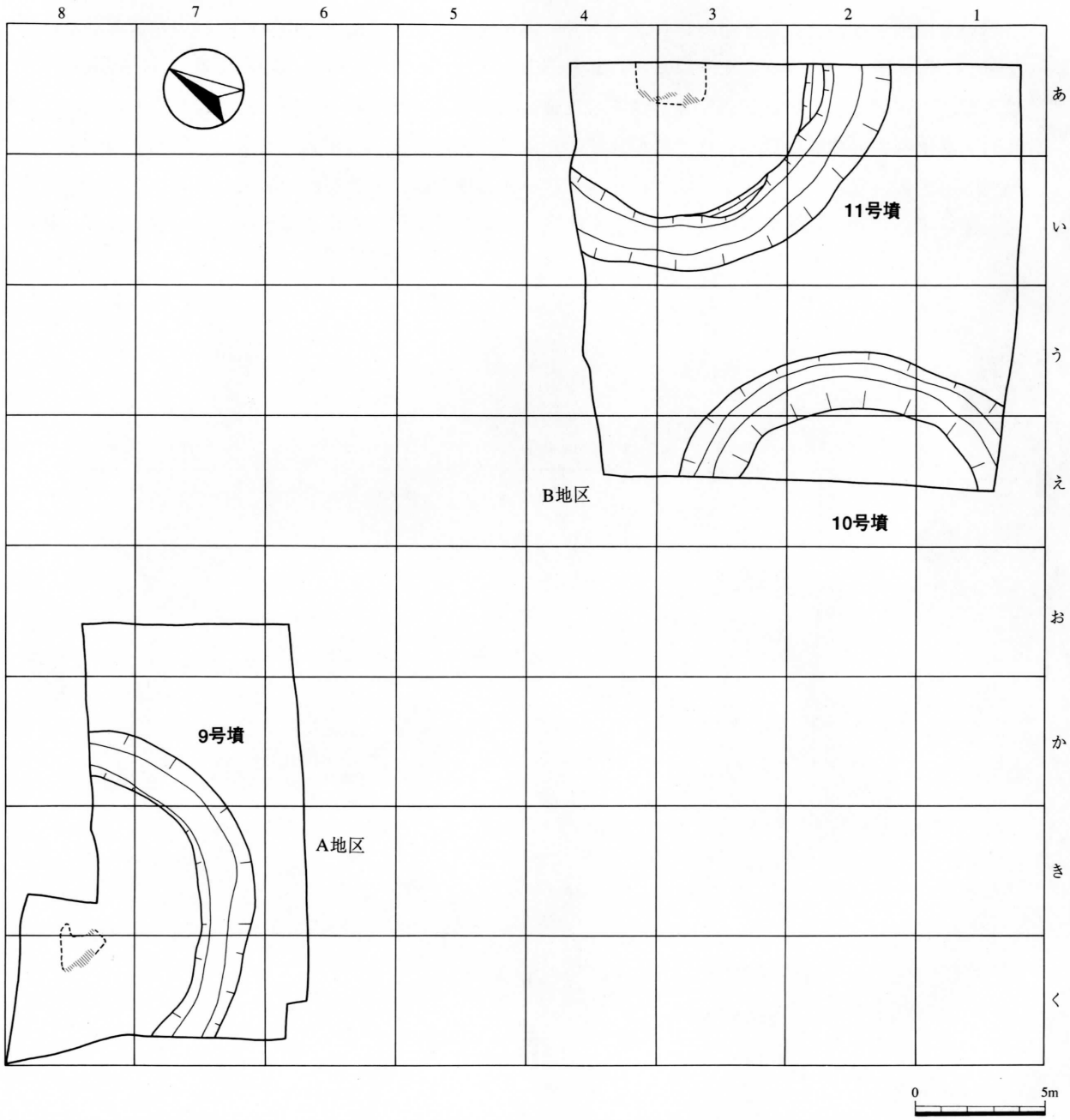
調査の状況と位置

調査対象地区の位置する台地は、農地開発による削平や谷部埋立てにより、大小の起伏や尾根が連なるという旧地形の様相をとどめない現況である。調査区は旧地形で台地の中央開析谷の左岸奥部に位置するが、現地形ではかろうじて左岸裾部の地形が残るだけで、これ以外は平担化が著しく、現況では古墳の存在を確認できない状態にある。調査対象地区は古墳近接地であり、墳丘削平はまぬがれないにせよ、周溝遺存の可能性は高く、地下状況確認のため詳細分布調査を実施した。調査対象地区に任意の試掘溝５本を設定し、トレンチ１では古墳周溝及び杯H(注10)、甕、高杯の遺物破片を検出、トレンチ３では攪乱を受けていたが、西側で周溝及び甕破片を検出、トレンチ４では南端部で周溝と、埴輪、杯H、甕の



0　10m

第４図　試掘溝位置・調査区設定及び遺構配置図（Ｓ＝1/500）



第５図　調査区域区割り図（Ｓ＝1/250）

破片を検出した。トレンチ５は大部分に攪乱が及ぶ状態であった。トレンチ出土の遺物はパンケース１箱分で、半分以上がトレンチ４出土の埴輪である。以上の結果により、調査対象区域内において、２～３基の古墳の存在が確認され、保存を重視して調査区を住宅建設予定地に留め、調査を開始する。

調査区域が２箇所に股がったため、西側をＡ地区、東側をＢ地区と設定したが、耕作地や雑木林を経て以後、Ａ地区はつい最近まで造園業者の敷地内であり、詳細分布調査トレンチ５の結果からみても、旧地形の削平とともに攪乱の進行も予想できる区域である。しかし、３基の古墳周溝が検出され、墳丘はやはり削平されているものの、２基については主体部の一部残存を確認した。Ａ地区検出のものを１号墳、Ｂ地区南側を２号墳、北側を３号墳としたが、旧地形で借屋古墳群の連続する区域内であるため、それぞれ、９・10・11号墳と改めて呼称する。また、詳細分布調査トレンチ４で確認され、現状保存することになった古墳は12号墳として呼称する。

古墳の位置関係は、第４図の通りである。旧地形をとどめないため立地状況はわからないが、地山面の状況は、９・10号墳の地山面がもっとも高く、北東側へ緩やかな傾斜がみられた。

また、調査区では、古墳検出以外で、７世紀後半～８世紀の古代遺物が出土している。調査区域が矢田野遺跡包蔵地でもあり、この関連と考えられるが、伴う遺構は検出されなかった。また、攪乱からも古墳のものと考えられる遺物が出土している。両者を併せてパンケース１箱未満であるが、これらの記述は省略する。

第２節　借屋９号墳の調査

１．遺構

＜古墳の規模・形態＞

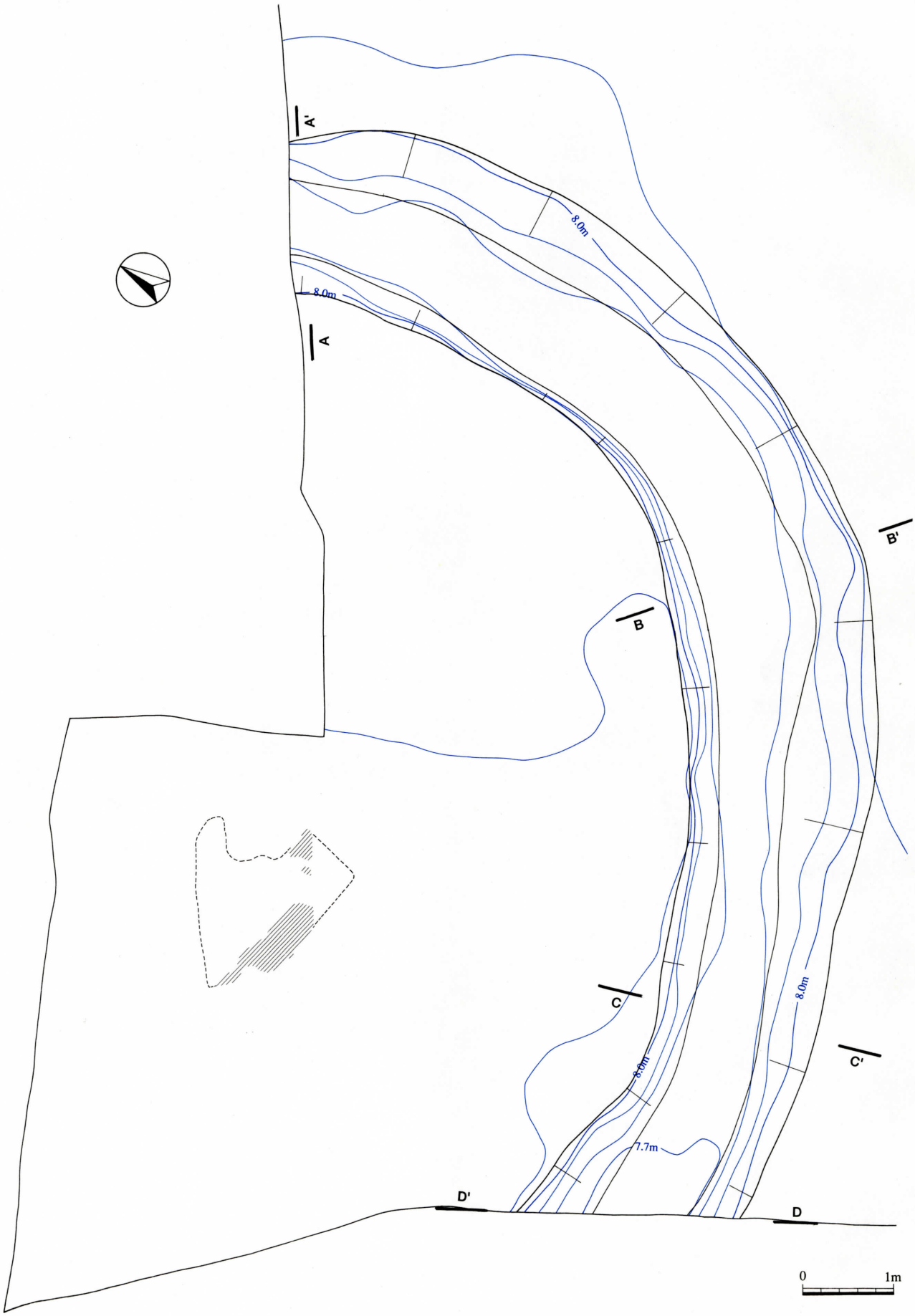
９号墳は、Ａ地区西側に位置する。周溝は、北側端から南西端をむすび、やや孤を描くように巡る。墳丘形態、規模は、調査区での周溝検出が全体の1/3に留まり一概にはとらえられないが、周溝規模を考慮した上で平面プランから復元すると墳形状は円墳と考えられる。また、規模は周溝下端の墳丘側立ち上がりを基準とし直径約12.5ｍと推定できる。墳丘は削平を受け失われており、高さは不明である。

＜周溝＞

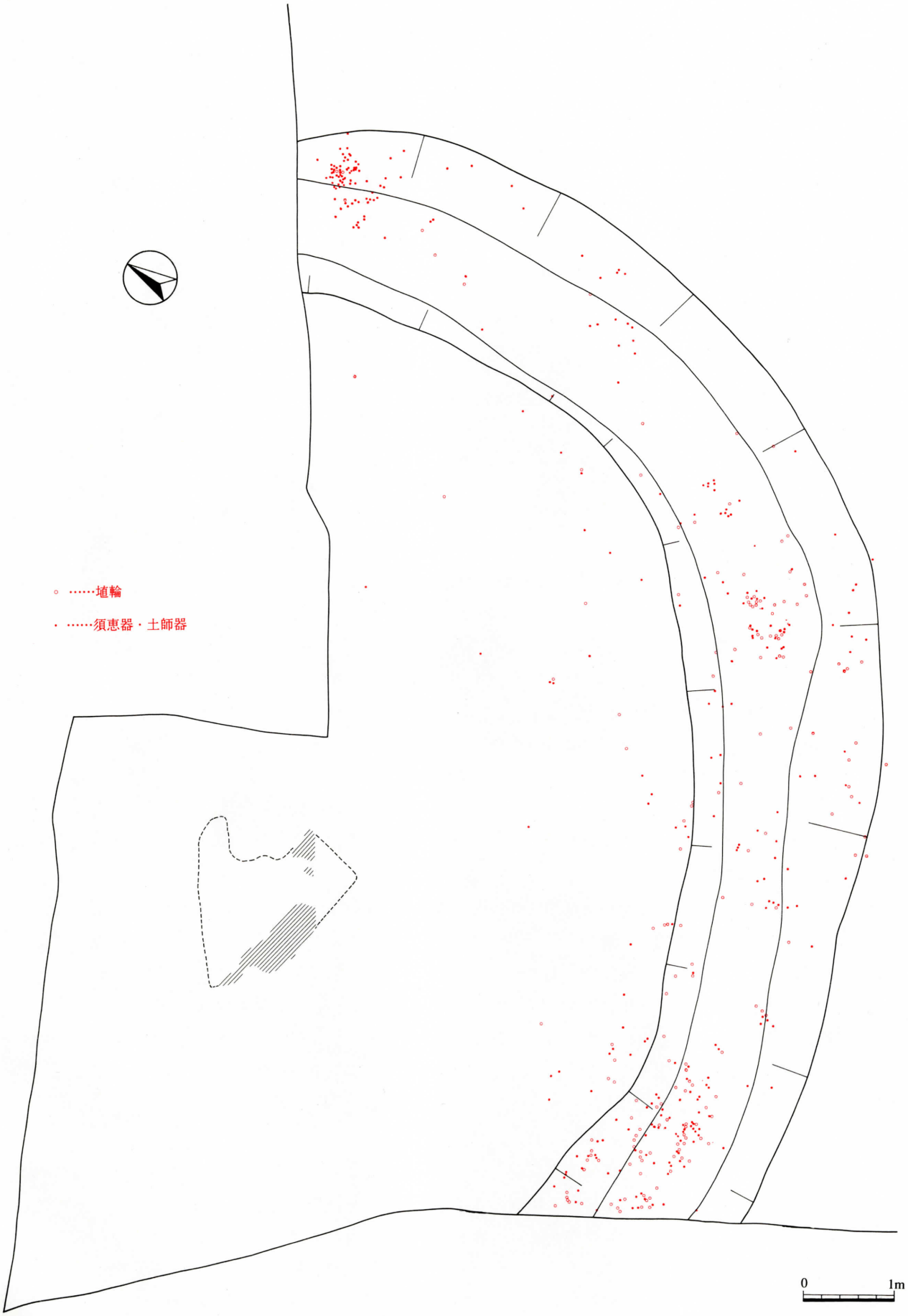
周溝は、底面の幅で約0.65ｍ～1.13ｍ、上面の幅で1.75ｍ～2.20ｍを測る。深さは一定ではなく、褐色土地山面より0.24ｍ～0.52ｍを測り、南西端が最も深い。褐色土の地山面を掘り込んで造られている。断面形は、ほぼ逆台形状を呈し底面と側面の境界が明瞭である。覆土は黒褐色土がベースである。周溝底面に人工的と思われる地山土ブロック混入層を確認している。これは、盛土の流入または古墳構築調整によるためと考えられるが、判断が出来なかった。

＜遺物出土状況＞

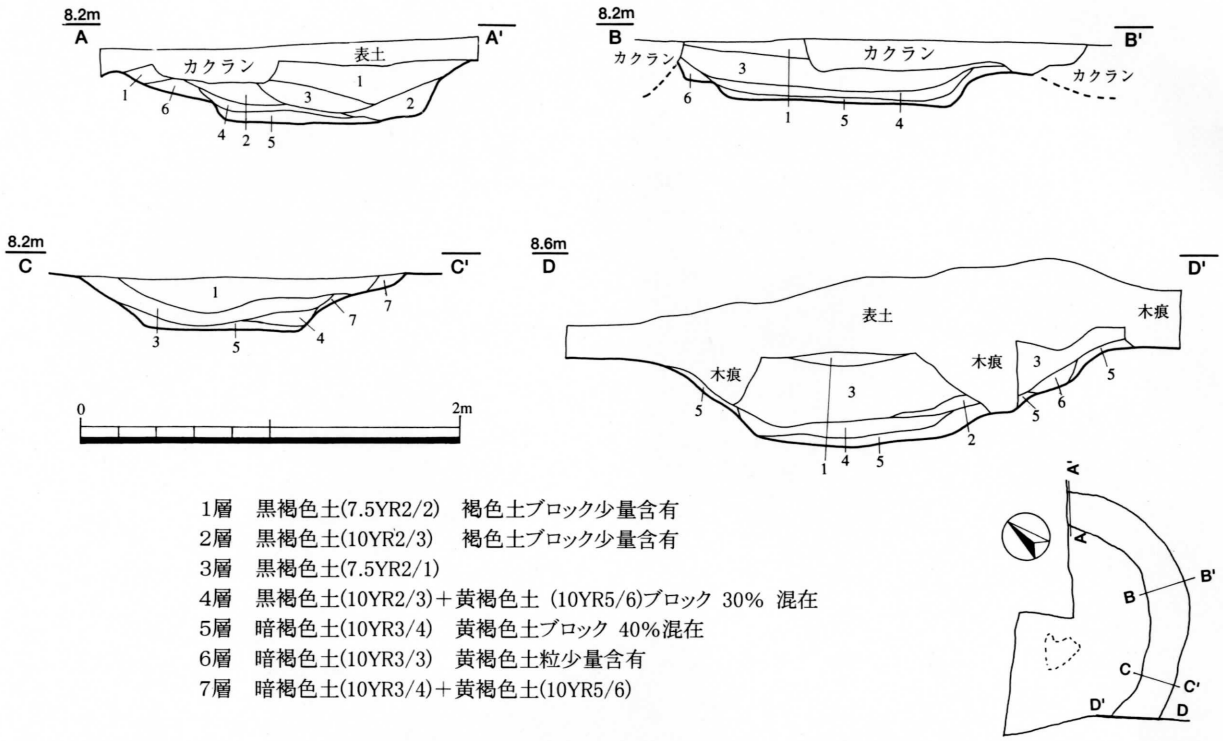
遺物は、ほとんどのものが周溝内から出土した。周溝南半分にあたる区域で、ある程度の集中がみられるものの、墳丘から短期間で一括に遺物が落ち込んだとは考えられず、破片が散乱しているという印象である。周溝の削平・攪乱の影響で遺物の移動があった可能性がある。しかし、周溝の最も深い地点であるセクションＣラインとＤライン間では、攪乱の影響も少なく比較的良好な状態で遺物の集中がみられ、底面から10～20cm間（４層より上、３層出土）で提瓶１個体が破片で出土している。全体的に、埴輪破片が非常に多く出土しており、須恵質と土師質の２つのタイプをもつ。その他杯Ｈ、小型壺、甕口縁等が破片で出土している。



第６図　借屋９号墳遺構平面・測量図（Ｓ＝1/60）



第７図　借屋９号墳周構遺物分布図（Ｓ＝1/60）



第８図　借屋９号墳周構セクション図（Ｓ＝1/40）

２．主体部の調査

＜主体部の状況＞

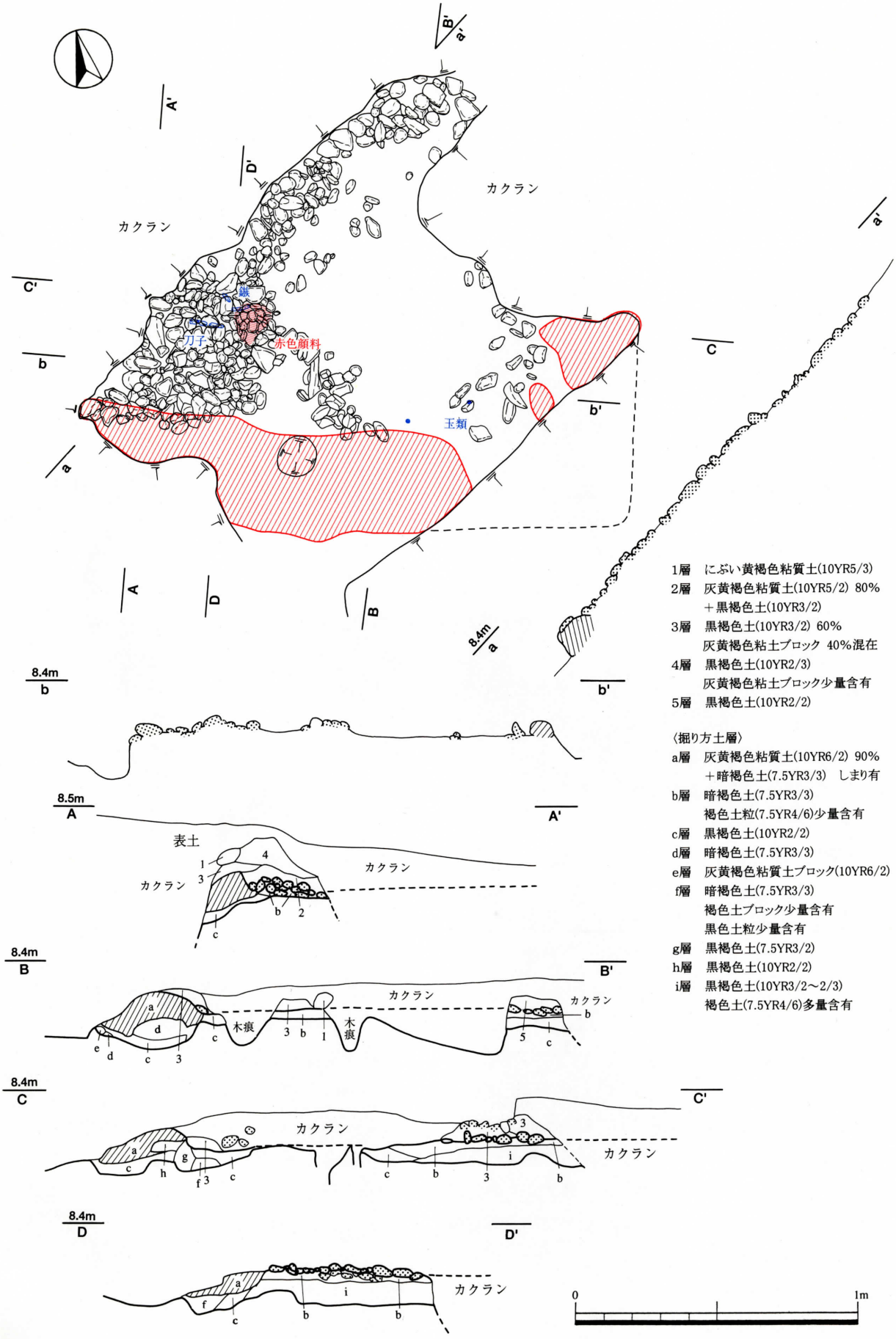
９号墳主体部は、調査区西端の壁際で白色粘土を検出したことから、急遽拡張して調査が行なわれた。現表土面に樹木が並び、すぐ脇には私道が設置されていた。表土や攪乱の除去作業を続ける中で、主体部内部の礫が表土や攪乱の土中に多く含まれる状態であり、主体部の破壊は著しいと言える。主体部の周囲は、南側を除いて取り囲むように攪乱を受けており、残存面積は約１㎡である。墳丘削平を考えれば、奇跡的に残っていたと言えよう。

＜規模・形態・位置＞

９号墳主体部は、礫床をもつ粘土室(注11)である。主体部の内外部の規模は、遺存状態が悪いためまったく不明である。主体部の主軸は、遺存率が低いので一概には言えないが、残存する２箇所の粘土壁（南側に位置するものを以下南壁、東側を以下東壁とする）から想定することが可能ではないだろうか。２箇所の粘土壁がもとは１つにつながっていたと仮定するならば、この部分は壁隅と考えられる。とすれば、主体部主軸は、南北軸もしくは東西軸になるものと予想できるのではないだろうか。前者であれば、古墳のほぼ中央に位置することになり、後者であれば古墳の中央からやや西南寄りに位置すると予想できる。

＜粘土壁＞

南壁、東壁の色調と質感は、黄色味かかった白色粘土で、両者の質に差異はなく、純粋な粘土塊といった印象であり、南壁、東壁ともに叩き締めたような硬さと、粘性をもつ。壁の角度を判断することは難しいが、直立タイプであった可能性が高い。理由は、南側西端の部分で直立が見られることと、やや中央よりでは粘土がマウンド状をなしているが、粘土上面内側に礫が貼り付く状態で認められ、壁崩壊によってマウンド状をなしたとはいえないことである。さらに、この粘土の両端が礫床面レベルよりも下に食い込んでいる。しかし、何分破壊されていて残りの悪い状態での検討なので、判断するのは難し



1層　にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)
2層　灰黄褐色粘質土(10YR5/2) 80%
　　＋黒褐色土(10YR3/2)
3層　黒褐色土(10YR3/2) 60%
　　灰黄褐色粘土ブロック 40%混在
4層　黒褐色土(10YR2/3)
　　灰黄褐色粘土ブロック少量含有
5層　黒褐色土(10YR2/2)

〈掘り方土層〉
a層　灰黄褐色粘質土(10YR6/2) 90%
　　＋暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり有
b層　暗褐色土(7.5YR3/3)
　　褐色土粒(7.5YR4/6)少量含有
c層　黒褐色土(10YR2/2)
d層　暗褐色土(7.5YR3/3)
e層　灰黄褐色粘質土ブロック(10YR6/2)
f層　暗褐色土(7.5YR3/3)
　　褐色土ブロック少量含有
　　黒色土粒少量含有
g層　黒褐色土(7.5YR3/2)
h層　黒褐色土(10YR2/2)
i層　黒褐色土(10YR3/2～2/3)
　　褐色土(7.5YR4/6)多量含有

第９図　借屋９号墳主体部平面図・セクション図（S＝1/20）

い。粘土壁厚は、18cm～25cmはあったと考えられる。

＜礫床＞

主体部床には、直径約５cmから10cmの川原石を中心として、その隙間に面がそろうように小さな礫が埋め込まれ敷きつめられていた。礫色調は、ほとんどのものが白色で中にはやや黄色味を帯びたものもあった。平面図上で、東壁側に礫のない空白部分があるが、これは攪乱や木根痕によって礫床が失われた状態である。刀子の出土した地点から西側と南側の部分で礫敷の重なり（以下上層礫と記述する）が見られた。この上層礫のレベル面で、鉄鏃が出土している。これについては、ちょうど鉄鏃の出土した地点に樹木の根が及んできており、礫床が一部浮き上がってしまった可能性がある。刀子出土地点より西側については、２つの可能性がある。１つは、樹木の根が見られないので攪乱によるものか、もう１つは主体部内部のかたづけがなされた痕跡の可能性である。 壁内面側部分で、粘土に貼り付く状態で重なった礫が認められるからで、内部かたづけの際に礫を押しやった跡か。また鉄鏃出土付近で、わずかではあるが粉状の赤色顔料が礫に付着していた。鉄鏃と赤色顔料の検出間に礫の重なりがあるとはいえ、鉄鏃の錆の可能性もある。

＜主体部出土遺物状況＞

破壊されているため、やはり遺物は少ないが、刀子、鉄鏃が１点ずつとガラス製小玉が２点出土している。刀子は、礫床面貼り付き状態で、切先が西を向く。鉄鏃は前記のとおりであるが、刀子のレベルよりも２cm上で出土している。玉類は南壁付近で出土している。攪乱部分がすぐ横に位置するため動いている可能性が高いが、刀子、鉄鏃とそれぞれ同じレベルで出土している。

＜礫床下掘り方＞

礫床下では、主体部の掘り込み後に礫床までを整地したと思われる暗褐色の土層が確認できた。また、粘土壁のほぼ下にあたる部分で、上端幅25cmから35cm、下端の幅12cmから15cmの溝を検出している。粘土壁に付随するように、横Ｌ字形をしている。この溝の覆土は、締まりの弱い黒褐色土が中心である。床下からはピットはまったく検出されなかった。

３．出土遺物

①主体部出土遺物

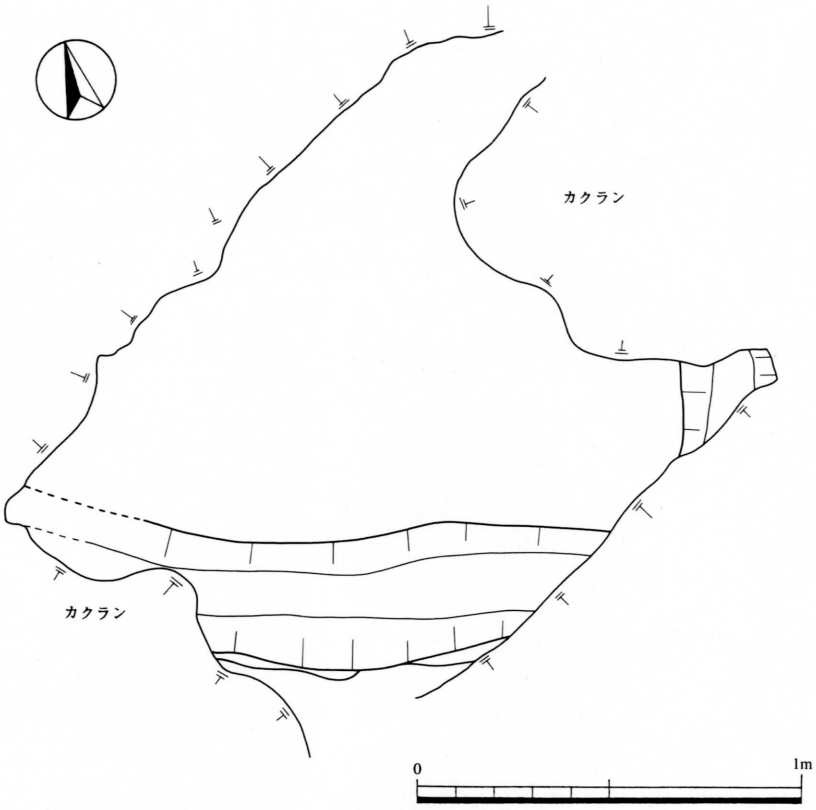
主体部からは、刀子１点、鉄鏃１点、玉類５点が出土している。

＜鉄製品＞（第11図１・２）

１は、礫床貼り付きで出土した刀子である。全長は現存値で10.9cmである。重さは錆を含め22.88ｇである。刀身部は外反りで元幅１cm，厚みは背側で0.3cm、切先はフクラ、背は平造りか。茎部では茎尻は一文字、茎胴は微先細、刀装具として剥離の激しい鹿角製の柄が着けられている。このため関の形状は不明である。２は、同じく礫床貼り付きで出土した柳葉尖根式の鉄鏃である。鏃長は現存値で8.7cm、刃部断面は平形で刃部長2.5cm、刃部幅1.1cm、刃部厚は0.2cmである。篦被長は5.1cm、篦被幅0.5cm、篦被厚0.3cmで平面形は直線、断面形は長方を呈し、関部は両関である。茎部の平面形は刺突状で断面形は丸を呈す。茎部長は1.1cm、茎部幅は最大で0.4cm、最少で0.3cm、茎部では、矢柄の木質がかろうじて遺存し、茎部関部で幅約0.1cmの植物繊維状の紐の痕跡が見られる。これで矢柄を固定したと思われる。重さは錆を含め9.93ｇ。

＜玉類＞（第11図３～７）

３は管玉である。緑色凝灰岩で、直径0.65cm、長さ1.96cmを測り、オリーブ灰色を呈す。穿孔は両側からなされているが、導き孔を持っている。重さは1.18ｇ。主体部排土からのものである。



第10図　借屋９号墳主体部掘り方溝平面図（Ｓ＝1/20）

４・５・６は、ガラス製の小玉である。いずれも不透明な水色をしており、製作時の気泡が残る。４は排土より、５・６は礫床貼り付きで出土している。４は直径0.46cm、厚さ0.45cm、孔径0.14cmを測り、重さは0.11ｇ。５は直径0.35cm、厚さ0.28cm、孔径0.1cmを測り、直径平面はやや楕円、側面はやや角をもつ。重さは0.05ｇ。６は直径0.43cm、厚さ0.25cm、孔径0.16cmを測り、気泡が目立つ。重さは0.06ｇ。７は、臼玉と思われる。石製だが石材は不明である。不透明の灰色で濁り、直径0.42cm、厚さ0.31cm、孔径0.15cm、重さは0.08ｇで、表面に研磨痕を残す。排土より出土している。

②　周溝出土遺物

器種として、須恵器では、杯Ｈ身１点、短頸壺１点、提瓶１点、甕４点、土師器では甕、そして埴輪が出土している。埴輪は土師質、須恵質が出土している。土師質埴輪は、確認可能破片数181点で、それぞれ橙色、生焼け状態の浅黄橙色の色調をもつ２個体の円筒埴輪である。しかし、内外面の剥離が著しく実測は不可能であった。全体の出土率は、破片数を基準として、土師質埴輪が約40％、須恵質埴輪が約10％、土師器破片約30％、須恵器甕、提瓶が各々約10％である。

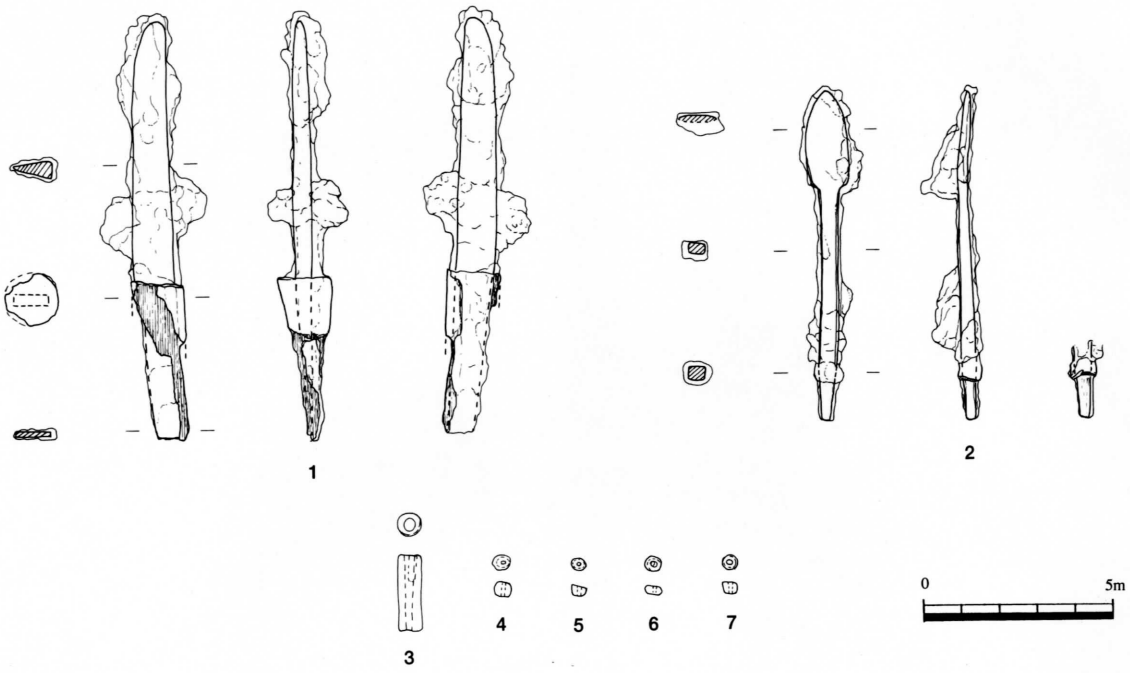
＜須恵器＞

杯Ｈ身　（第12図８）

主体部近くのマウンド部分から出土している。口縁部はやや内傾して反って立ちあがり、受け部から底部にかけてやや丸みをおびる。底面に右回転ヘラケズリがみられる。

短頸壺　（第12図９）

肩部と胴部下（図に示されていないが）に２条沈線を巡らし、中央にやや不明瞭な１条の沈線を施す。胴部は、最大径を上部にもつ算盤玉形である。



第11図　借屋９号墳主体部出土遺物実測図（1/2）

提瓶　（第12図10）

周溝南端部分でまとまって出土している。口縁は大きく外反し、口縁端部はつまみあげられ、歪みながら胴部中軸から左へずれてつけられている。胴部内面の調整は底部側面でカキ目の後、多方向の指ナデが見られる。底部側面から胴部への立ち上がりで指一本分のロクロナデを施すが、胴部では４本に及ぶ粘土紐痕がそのまま残り、非常に不規則な指圧痕と指でなで回した痕跡が閉塞部まで続く。閉塞部分は、起伏の激しい絞ったような痕跡と、その周囲に円形状の指圧痕を施す。底部側面外面はヘラ切り後指で押さえただけである。器厚は１～1.3cmの不均一で厚く重い。非常に雑な作りをしている。

甕　（第12図11～14）

確認できた破片数は49点だが、個体数では４個体が確認できたのみで、その他は小破片である。11は、大甕の頸部で、胴部内面にＤａ当て具痕が見られ、頸部接合粘土によって一部消されている。12は、口縁端部外面と、頸部に櫛描波状文が施されている。これの下に位置する口頸部破片も出土しているが接合不可能であった。２条沈線下に６状の櫛描波状文が２段施されている。13･14は、接合土・補強土と、口頸部、胴部の粘土色調が明瞭で、口頸部、胴部別造り成形が予想される。口頸部接合後、頸部を内外面から指ナデ調整するため、胴部当て具痕タタキ痕、口頸部外面のカキ目調整が粘土に覆われたり消えたりする。14の外反する口頸部内面にはＤａ当て具痕がかろうじて見られる。両者とも大甕で、口頸部以外では、胴部破片も出土している。

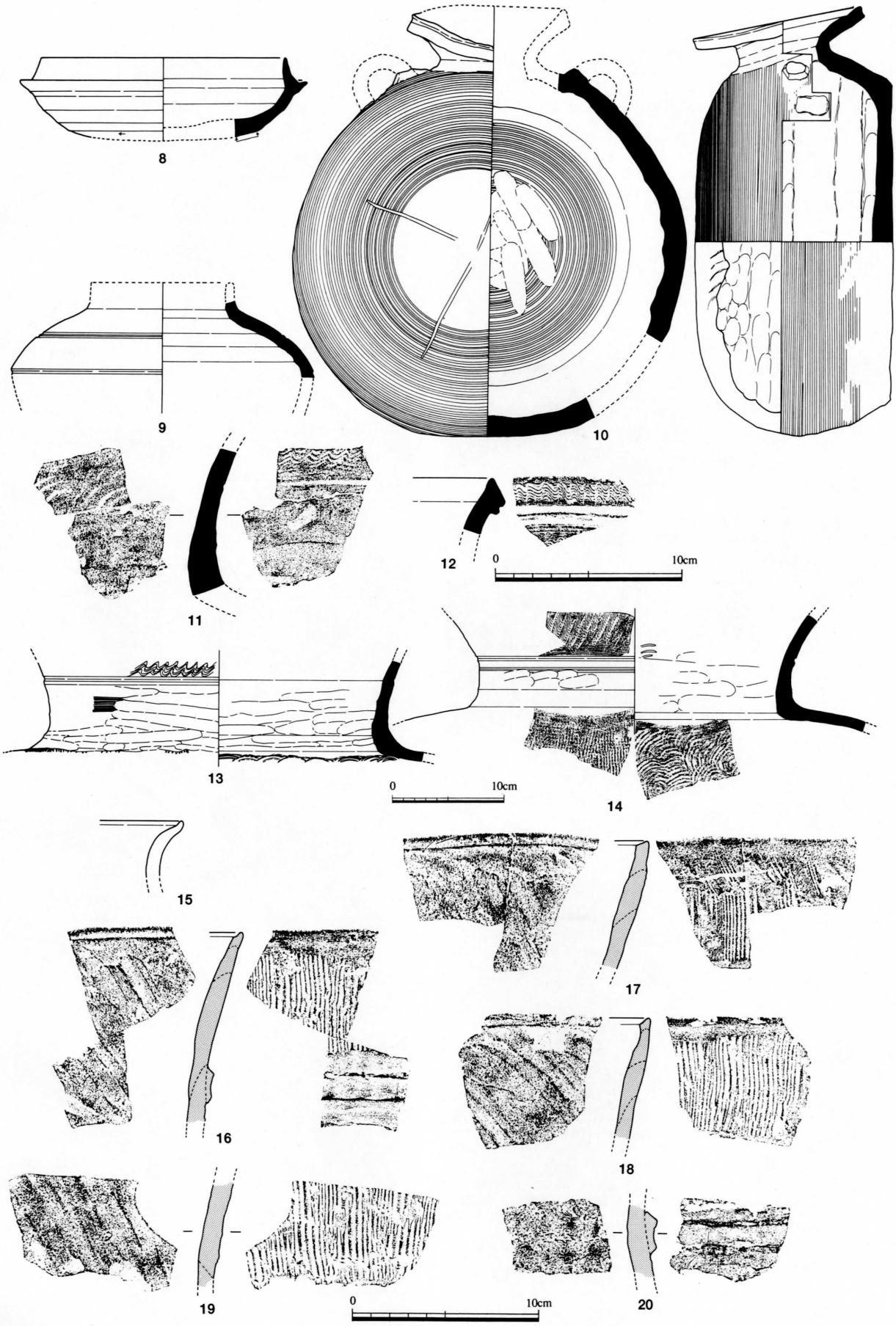
＜土師器＞　（第12図15）

９号墳に伴うと思われる破片数は127点だが、個体数では３個体が確認できたのみである。甕が２個体、小型壺？が１個体である。復元は不可能で、図化可能は１点のみであった。15は甕で、口縁が短く外反し、口縁端部をつまみあげ、頸部付近で器肉が厚くなる。

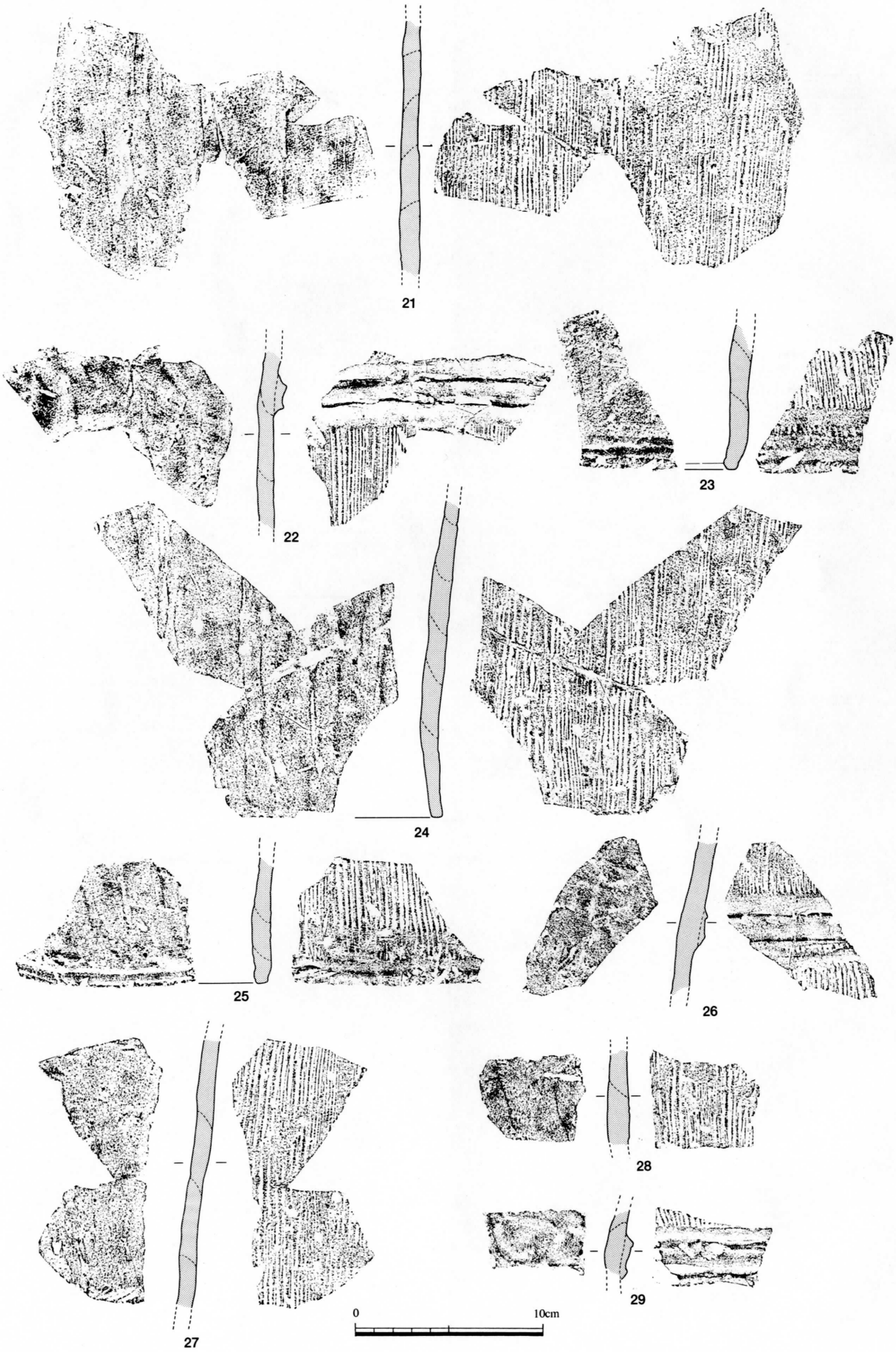
＜埴輪＞

須恵質埴輪　（第12･13図16～29）

破片数は39点出土しているが、個体数では３個体に換算できる。全て円筒埴輪である。須恵質埴輪16～27の外面は、須恵器特有の還元焼成された灰色と、灰黄褐色を併せ持つ色調である。内面は灰黄褐色、



第12図　借屋９号墳出土遺物実測図（1/3，中段1/5）



第13図　借屋９号墳出土遺物実測図（1/3）

断面では中央に還元焼成されたやや暗めの灰色があり、内外面には橙色の層が見られる。埴輪成形で粘土紐を積み上げる時、内面側の親指が下へ移動し、他の指は外面側に位置して上へと移動させながら、粘土を接合してゆく。このような粘土紐接合痕は、断面でみると内面から外面へ右上がりの状態を示し、内外面に見られる接合痕跡でも確認することができる。しかし、22～27の底部付近では、粘土紐接合痕は、逆転している。つまり、倒立技法で成形されたものと判断できる。26・27では、ナデ消されているＤａ当て具痕が見られ、倒立後のタタキ調整である。借屋９号墳出土の須恵質埴輪は、矢田野エジリ古墳出土の須恵質埴輪と色調、胎土、焼成、成形方法が類似する。(注12) 28･29は生焼け状態でそれぞれ別個体である。

４．借屋９号墳の築造年代

古墳全体の1/3の調査に終わり、良好な資料もあるとは言えず、周溝出土遺物に依存するという中で、年代を検討してみる。まず杯Ｈ身であるが、南加賀古窯跡群古墳時代須恵器編年でⅣ期(注13)にあたり、これは田辺編年陶邑ＴＫ10併行(注14)のものである。また、須恵質埴輪については、ＴＫ10併行の矢田野エジリ古墳出土埴輪とほぼ同じものである。こういった須恵質の埴輪はこの時期以降消滅してゆく傾向がある。これらを総合して考えれば、現時点での築造年代はＴＫ10併行とするのが妥当であろう。

第３節　借屋10号墳の調査

１．遺構

＜古墳の規模・形態＞

10号墳はＢ地区内南側に位置する。周溝は、西側端から南端をむすび孤を描いて巡り、南端側で広がりをもつ。墳丘は削平により失われており、高さは不明、主体部も調査区外に位置し不明である。

10号墳形状・規模は、周溝プランから復元すれば円墳であると考えるのが妥当かもしれないが、周溝の深さから円墳と想定しきれない。詳細分布調査で、10号墳の東側に位置するトレンチ３の南側部分に周溝を検出している。10号墳を前方後円墳と仮定すれば、このトレンチ内検出の周溝は、10号墳の前方部周溝となる可能性があろう。しかし、トレンチ内の周溝は別の古墳に伴う外部施設とも考えられ、現時点では、円墳、前方後円墳両者の可能性をもつのである。

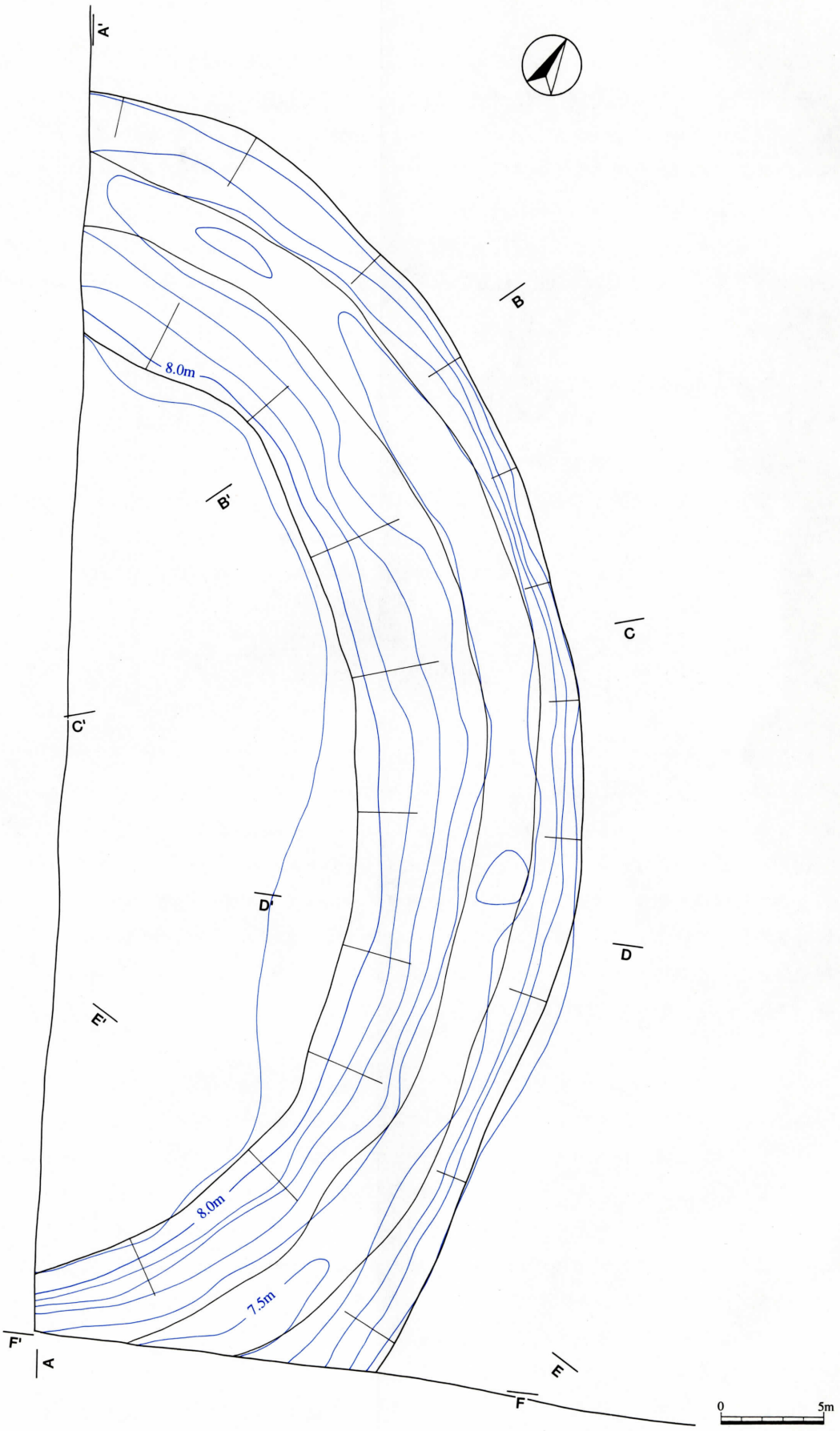
＜周溝＞

周溝は、地山面を堀り込んで造られており、底面の幅で約0.44ｍ～0.76ｍ、上面の幅で2.00ｍ～2.50ｍを測り、墳丘側側面に緩やかな一定の段を形成する。底部断面形は逆台形状を呈し、深さは0.44ｍ～0.64ｍで底面レベルは標高7.6ｍラインにほぼ揃うが、最も南端ではこのラインより約10cm下がる。

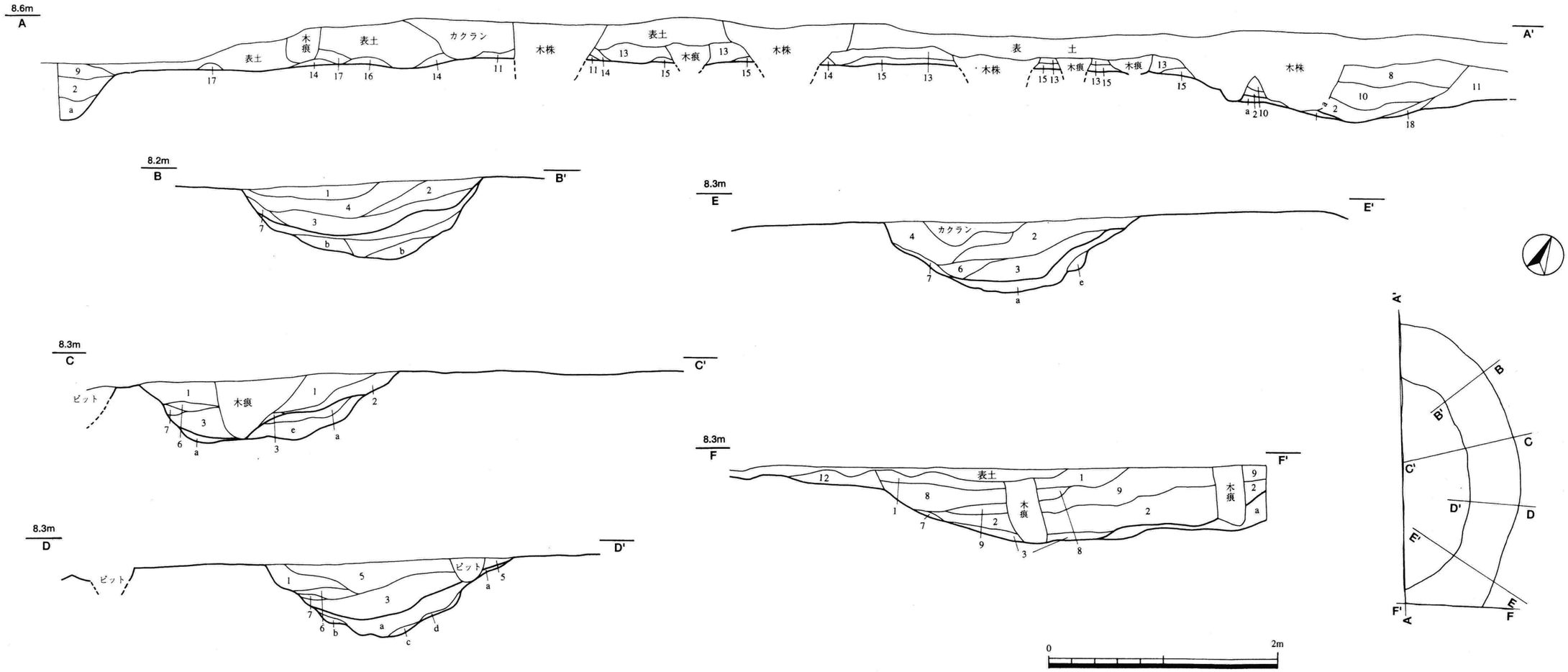
覆土は、黒褐色土をベースとする。また、10号墳の周溝には掘り方が確認でき、覆土と掘り方覆土の境界は明瞭である。掘り方覆土は、暗褐色土や褐色土中に硬化する黄褐色土ブロックが混入する層を中心としており、掘り方底面から墳丘側にかけて認められる。掘り方底面の凸凹面を整備すると同時に、周溝底面をレベル調整しながら周溝を整形したものと考えられる。掘り方までの深さは0.52～0.66ｍを測り、掘り方底部断面形では凹凸を伴うＵ字状を呈す。

＜遺物出土状況＞

遺物は、完形の杯２点を除いて破片状態で周溝内から出土し、保存状態は良好である。掘り方からの出土は、成形時の混入がわずかにあるだけで、それ以外は認められない。よって、遺物出土状況は、掘り方を除く状況を記述する。以下に記す“底面”は、標高7.6ｍラインを基準の高さとする周溝底面を意



第14図　借屋10号墳遺構平面・測量図（S＝1/60）

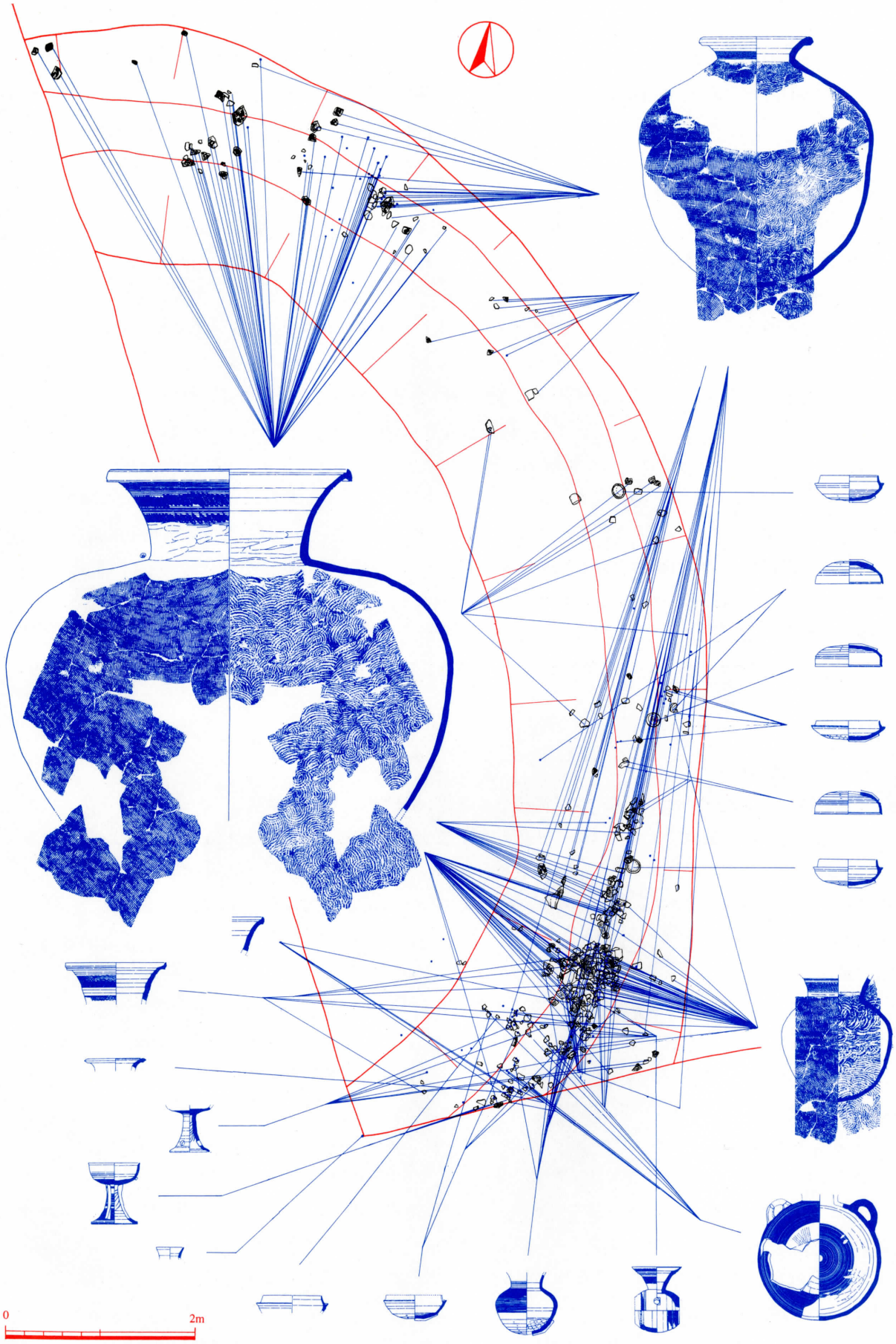


1層 黒褐色土(7.5YR2/2)
2層 黒色土(7.5YR2/1)
3層 黒色土(7.5YR1.7/1)
4層 黒褐色土(10YR2/3)＋暗褐色土(10YR3/4) 60%
5層 黒褐色土(10YR2/3)
6層 黒色土(10YR2/1)
7層 暗褐色土(10YR3/3) 褐色土粒(10YR4/6)少量含有
8層 極暗褐色土(7.5YR2/3)
9層 黒褐色土(7.5YR2/2)
10層 黒褐色土(10YR2/3) 褐色土粒(10YR4/6) 40%混在
11層 黒褐色土(10YR2/2)
12層 極暗褐色土(7.5YR2/2) 黒色土粒含有
13層 黒色土(10YR2/1)
14層 暗褐色土(7.5YR3/4) 褐色土ブロック(7.5YR4/4) 30%混在
15層 黒褐色土(7.5YR2/2)
16層 黒褐色土(7.5YR2/2) 明褐色土ブロック(7.5YR5/6)多量含有
17層 黄褐色土(10YR5/6)＋褐色土(10YR4/6) 粘性強
18層 黒褐色土(7.5YR2/2) 褐色土粒少量含有

〈掘り方土層〉

a層 暗褐色土(10YR3/3)＋硬化する褐色土ブロック(10YR4/6) 40%
　＋黒褐色土(10YR3/2) 10% しまり有
b層 暗褐色土(10YR3/4) 硬化する褐色土ブロック 多量含有
c層 暗褐色土(10YR3/4)＋褐色土(10YR4/6) 60%
d層 暗褐色土(10YR3/4)＋褐色土(10YR4/6) 40%
e層 褐色土(10YR4/6) 70%＋暗褐色土(10YR3/4) 黄褐色土ブロック多量含有

第15図 借屋10号墳周構セクション図（S＝1/40）



第16図　借屋10号墳土器出土状況（S＝1/60）

味する。しかし、セクションFラインにあたる周溝南端部分については、標高7.5mを基準とする。

溝内からは、杯H蓋・身、高杯、樽型瓹、提瓶、横瓶、小型壺、小甕、中甕、大甕、器台が良好な状態で出土している。周溝の北側（C～Dライン間より北側部分）で中・大甕破片が出土する以外は、ほぼ南側区域（C～Dライン間より南側部分）に遺物が集中している。杯H身2は完形で底面直上で出土し、セットと思われる完形杯H蓋1はこれより5cm上のレベルで出土する。3の杯H蓋は、底面より15cm内で破片で出土している。また、5の杯H身も底面直上で出土している。この他の杯は、上層を中心に層範囲もばらつき破片となって出土している。以上の杯のうち、6・7は南端部に出土する。これ以外は、セクションDラインを中心として北南へそれぞれ約2mの範囲内に集中する。Dラインより南側区域の底面から約10cm～20cm間で、樽型瓹、小型壺、小甕がそれぞれまとまって出土しており、提瓶も出土レベルは同じだが、前群程まとまりはない。大甕、中甕は、それぞれ2～3箇所に集中する傾向にあるが、周溝内全域に分散して破片は出土している。大甕は南側部分のものは底面から約10cm～20cm上のレベルを中心にして出土し、北側のものは底面より20cm～40cm上、中甕は、南側のものは底面より10cm～40cm上、北側のものは底面より15cm～25cmのレベルを中心として出土している。

以上の周溝出土須恵器は、意識的に一括投棄されたものか、もともと墳頂にあったものが転げ落ちたものであるかは判断が難しい。まとまって出土する樽型瓹、小型壺、小甕は、投げ込まれた可能性が高いが、周溝底面から浮いた状態は何を意味するのであろうか。さらにこれより下のレベルで出土する完形杯2点の意味も判断しかねる。主体部内に供献されなかった可能性があると考えられないだろうか。中甕・大甕は周溝内で2～3箇所に集中しながらも分散して破片が出土するため1個体をそのまま周溝に投棄したとは考えられない。墳頂で割られたものを投棄したか、墳丘斜面で投棄されたものが分割し落ち込んだものと考えられる。

2．出土遺物

出土遺物は、須恵器では杯H蓋・身、高杯、樽型瓹、小型壺、提瓶、横瓶、器台、小甕、中甕、大甕が出土している。土師器では、56破片が出土し、2個体の甕を確認しているが、細片で図化はできなかった。全体的に須恵器甕が最も多く、破片数割合は64％を占め、土師器片が10％、須恵器杯Hが9％である。杯Hは後述する以外に、蓋、身の識別不可能な破片が10破片6個体出土している。

＜須恵器＞

杯H蓋　（第17図1・3・4）

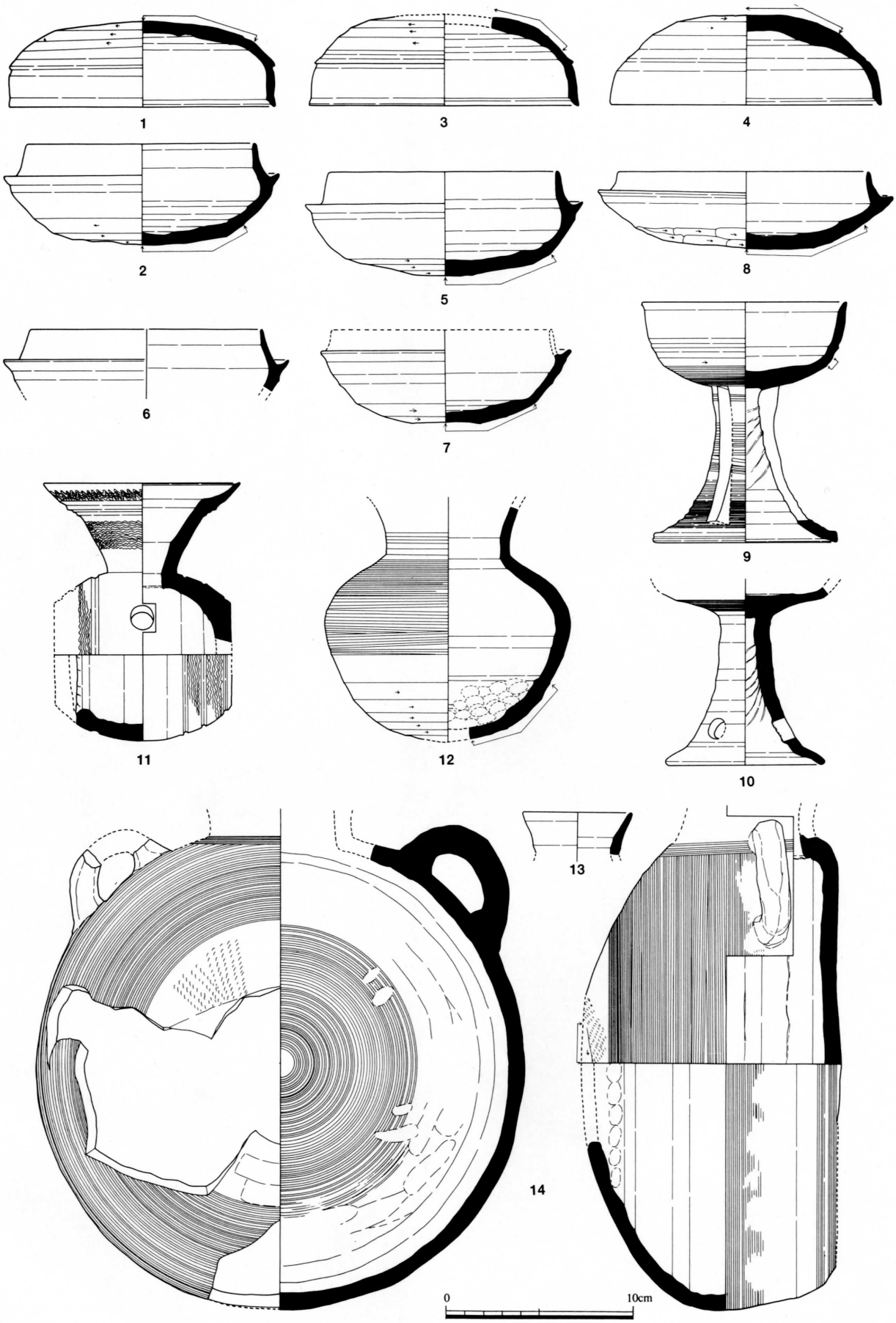
破片数は23点で、個体数は4個体に換算できる。1・3は天井部と口縁部との境で深い明瞭な段をもつ。口縁端部は内傾する段をもつ。1の天井部は平たく、3の天井部はやや丸みをおびる。4は、天井部から緩やかにカーブして口縁部に至る器形を呈し、天井部と口縁部の境が緩く屈曲し不明瞭な沈線が巡る。口縁端部は不明瞭な段をもつ。

杯H身　（第17図2・5・6・7・8）

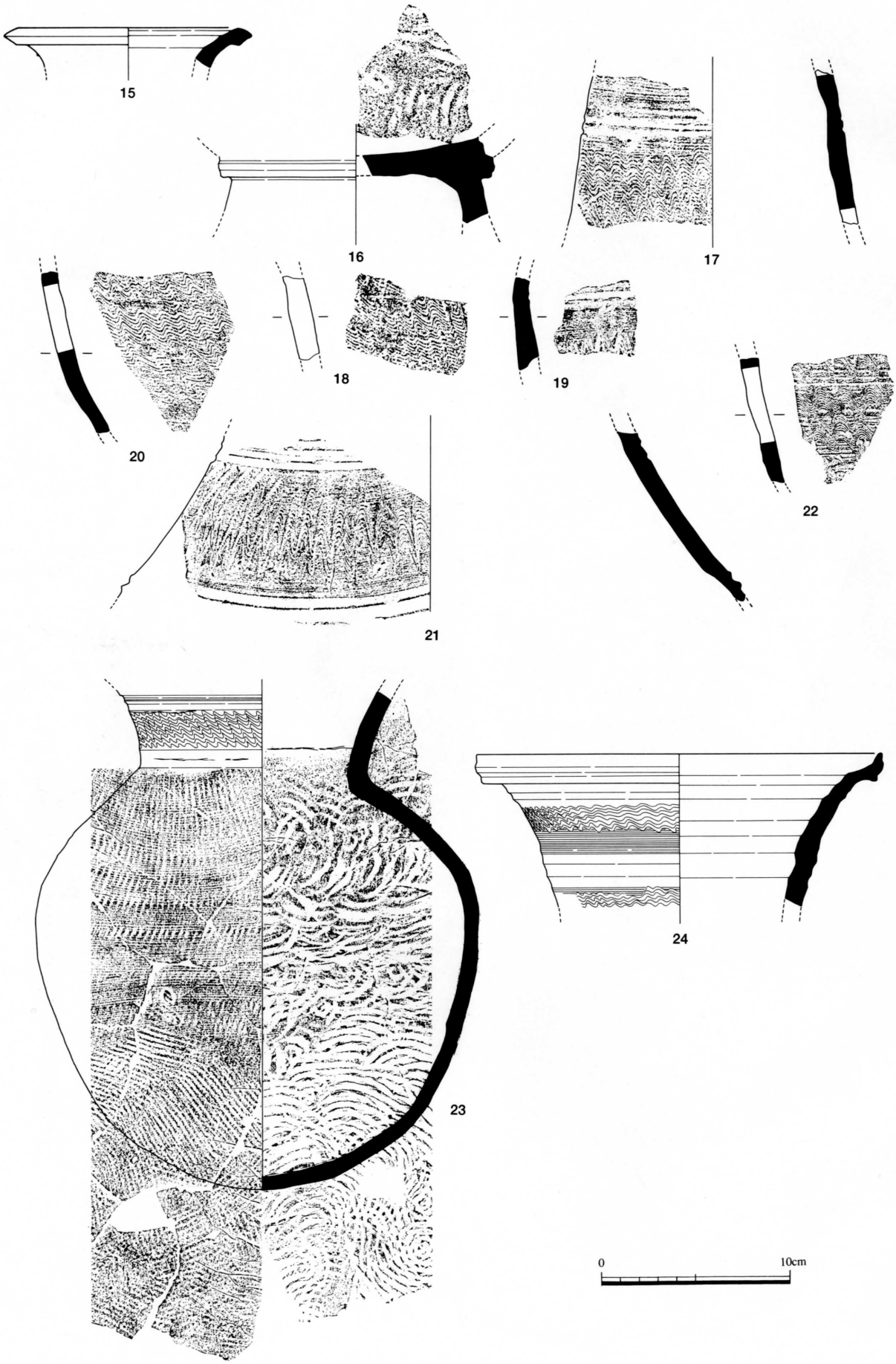
破片数は17点で、個体数は5個体に換算できる。2・5の口縁部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部は丸く、底部はやや平たい器形を呈す。6は口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、器肉が薄く、口縁端部が丸い器形を呈す。7は比較的深く丸い底部をもつ。8は、口縁部がやや内傾気味に反って立ち上がり、器肉が口縁端部に向かって薄くなり、底部は偏平器形で手持ちケズリ調整を施す。

高杯　（第17図9・10）

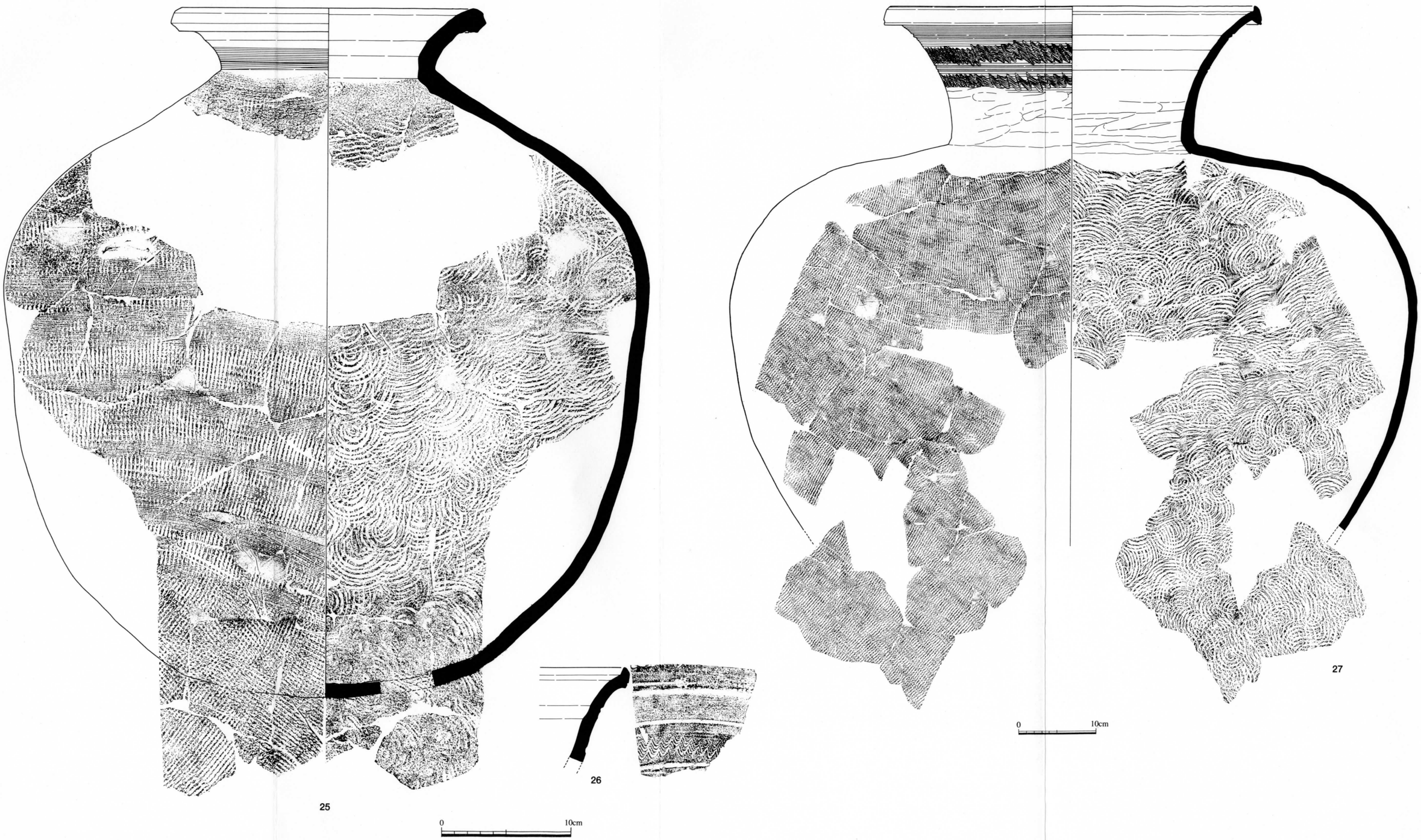
破片数は15点出土しており、個体数は5個体に換算できる。9・10とも無蓋高杯である。9の杯部口縁は、緩やかに外反しながら外傾し、口縁端部にかけて薄くなり、杯部の回転ヘラケズリ上に稜を形成



第17図　借屋10号墳出土遺物実測図（1/3）



第18図　借屋10号墳出土遺物実測図（1/3）



第19図　借屋11号墳遺物実測図（S＝1/60）

する。脚は、裾部で強く外反して広がり、全体にカキ目を施す。10の脚は裾部で緩やかに外反し、外面のカキ目は指でナデ消されている。

樽型瓹　（第17図11）

出土した9点の破片は、閉塞側面部分が欠けたが、すべてを1個体に復元できた。口頸部は強く外反して広がり、内面で明瞭な段を形成しながら口縁端部にかけて器肉が薄く、口縁端部内面で段をもつ。胴部器肉は厚く、明瞭な3条の沈線が巡る。側面全体を円盤貼り付けで閉塞している。底部側面側の沈線区画内に7条1段、これより1つ内側の区画内に6条1段、口頸部外面の稜から口縁端部までの区画に7条1段、稜下に14条1段の櫛描波状文を施す。沈線・波状文以外の部分は、内外面とも全体に丁寧なロクロナデが施されている。この樽型瓹は、南加賀古窯跡群産の須恵器とは質が異なる。在地産の可能性を持つが、南加賀産と特定はできない。樽型瓹は、5C代を中心として出土例があるが、6C代のものは極希であり、石川県では初例となる。(注15)

小型壺　（第17図12）

破片数で16点出土し、口縁部は欠けたが、すべて1個体に復元された。肩部がやや張る器形で、頸部は絞り気味で外反する。

提瓶　（第17図13・14）

確認できた破片数は28点で、個体数は2個体に換算できる。13は口縁部の1破片で、器肉が薄い。14は、おおぶりで、器肉が均一である。底部側面はヘラ切り後、指ナデし、間隔を保つ状態でカキ目調整がされている。円盤貼り付けによって閉塞がされており、内面の閉塞部付近に指圧痕が見られる。

横瓶　（第18図15）

確認できた破片数は1点で1個体であり、胴部については確認できていない。口縁部破片で、口縁端部が肥厚し口縁端部外面に面をもつ。

器台　（第18図16～22）

出土破片数は8点、個体数は2個体に換算でき、表土からも2破片出土している。22のみ焼成が異なるため別個体と考えられる。19以外の破片全面にカキ目調整後、櫛描波状文が施されており、三角形スカシをもつ。確認可能な櫛描波状文は、16の残存外面で5条1段、17外面で2条沈線下に8条2段、19は21と同部位であり、20は8条4段、21は2条沈線と2段稜の区画内に11条で左1段右2段のおおぶりな波状文を施す。22は、11条3段である。16は内面に工具によるものと考えられるミガキがみられ、器受部外面に稜を伴った突帯が巡る。受部と脚部の接合痕は、断面で明瞭に現れており、突帯が接合土の役割を果たしている。

甕　（第18・19図23～27）

確認できた破片数は314点で、識別個体数は小甕4個体、中甕2個体、大甕3個体、その他細片である。23は小甕で17破片1個体がまとまって出土し、口縁部は欠けているがほぼ復元できた。やや肩が張る器形である。頸部外面の2条沈線下に9条1段の櫛描波状文が巡り、頸部内外面で粘土紐接合痕がみられる。図には示されていないが、櫛描波状文の最下部が指ナデによって一部消されており、口頸部、胴部別造り接合の可能性がある。24も小甕である。口縁部は強く外反して、口縁端部は内湾し肥厚して1段の陵をもつ。外面は不明瞭な2条の稜で区画された中に8条1段の櫛描波状文を施す。25は中甕で、口頸部は強く外傾し口縁端部で複合口縁状に突帯が巡る。肩部から胴部にかけてやや直線的で、下半は丸みをおびる。26は、中甕破片で口縁は肥厚し外面に沈線を施し、端部は内湾する。外面には2条の沈線で区画された中に7条1段の櫛描波状文を施す。27は、大甕である。口縁は強く外反し口縁端部は肥厚して外面に面をもって沈線を施し、胴部は肩が張る器形である。口頸部外面に2条沈線を巡らせ、区画

内に14条１段、区画外に10条１段の櫛描波状文を巡らせる。口頸部、胴部は別造りされた後接合されている。接合部分は内外面とも指ナデがされている。復元可能であった胴部内面で、４段階の粘土接合痕跡がみられ、粘土紐の積み上げと乾燥を繰り返しが粘土色調によって明確に現れている。

３．借屋10号墳の築造年代

出土した杯Ｈの蓋・身の８点を中心に、周溝出土の資料ではあるが年代を検討してみたい。蓋は、天井部と口縁部間に明瞭な境を示す１・３のタイプと、天井部と口縁部間が緩く屈曲し不明瞭な沈線を施す４の、２つのタイプに分類することができる。身では、口縁が12cm前後で口縁が垂直気味に立ち上がる形態で、口径が小さく器高・立ち上がり高共に高めの傾向をもつ２・５（６は口径が明確でないが、立ち上がり高からこちらに属すると考えられる）のタイプと、口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、口径がやや大きくなり、器高・立ち上がり高ともに低めの傾向をもつ７・８の、２つのタイプに分類可能である。１・３の蓋と２・５・６の身は南加賀古窯跡群古墳時代須恵器編年でⅡ期にあたり、これは陶邑ＭＴ15に対比できる。また、４の蓋と、７、８の身は同じく南加賀窯編年のⅢ期後半からⅣ期前半に属し、陶邑ＴＫ10に位置付けできる。つまり、現時点で周構内から２時期の杯が出土しており、借屋10号墳はＭＴ15併行に築造後、追葬が行なわれた可能性をもつ。

第４節　借屋11号墳の調査

１．遺構

＜古墳の規模・形態＞

11号墳は、Ｂ地区北東側に位置し、周溝は、北側端から東側端をむすび孤を描いて巡る。墳丘形態、規模は、調査区での周溝検出が全体の約1/3に留まり一概にはとらえられないが、周溝規模を考慮した上で平面プランから復元すると墳形は円墳と考えられる。また、規模は周溝下端内側立ち上がりを基準とし直径約12.2ｍと推定できる。墳丘は削平を受け失われており、高さは不明である。

＜周溝＞

周溝は、底面の幅で約0.80ｍ～1.12ｍ、上面の幅で1.74ｍ～3.24ｍ、褐色土地山面を掘り込んで造られており、深さは地山面より0.27ｍ～0.46ｍを測る。断面形は、ほぼ逆台形を呈し、底面は北側から東端へかけて下降する。墳丘側において、テラス状の平担面を２箇所確認している。覆土は柔らかい黒褐色土がベースであり、底面で人工的と思われる黄褐色土地山土ブロック混入層を確認している。しかし、盛土の流れ込み若しくは掘り方覆土としての判断はできなかった。

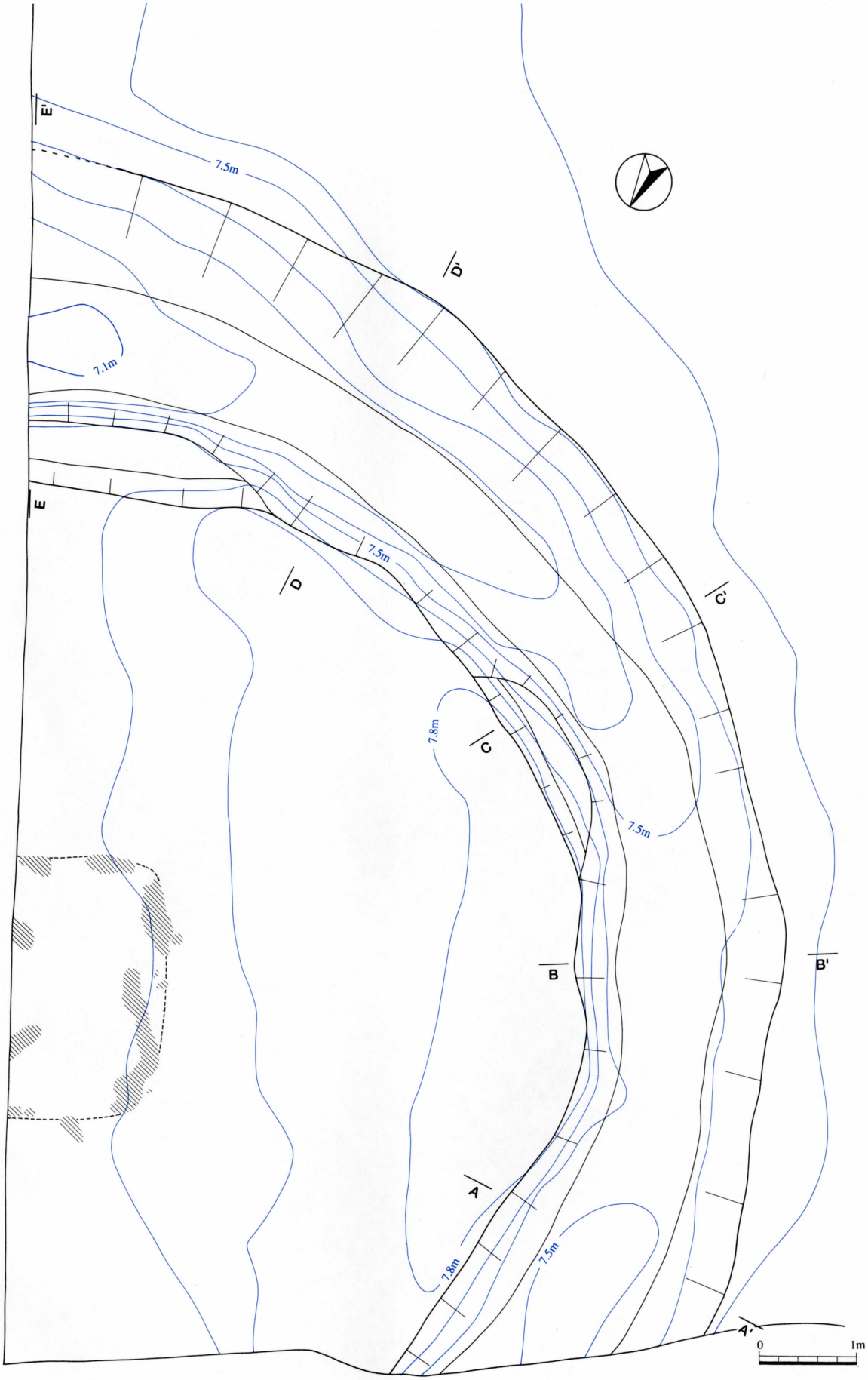
＜遺物出土状況＞

遺物は、ほとんど周溝内から出土するが、墳丘削平と攪乱により遺存状態は非常に悪い。周溝北端のセクションＡライン付近で大甕破片のある程度の集中がみられるものの、層範囲は底面から10cm以上上層までと広範囲に及ぶ。甕以外の杯・高杯などの遺物は、土層の１・２層を中心に３層まで含む覆土中の、かなり上層を中心として、破片が散乱する状態で出土する。遺物破片の散乱は、墳丘の削平で遺物が落ち込んだものか、攪乱の影響で遺物の移動があった可能性がある。

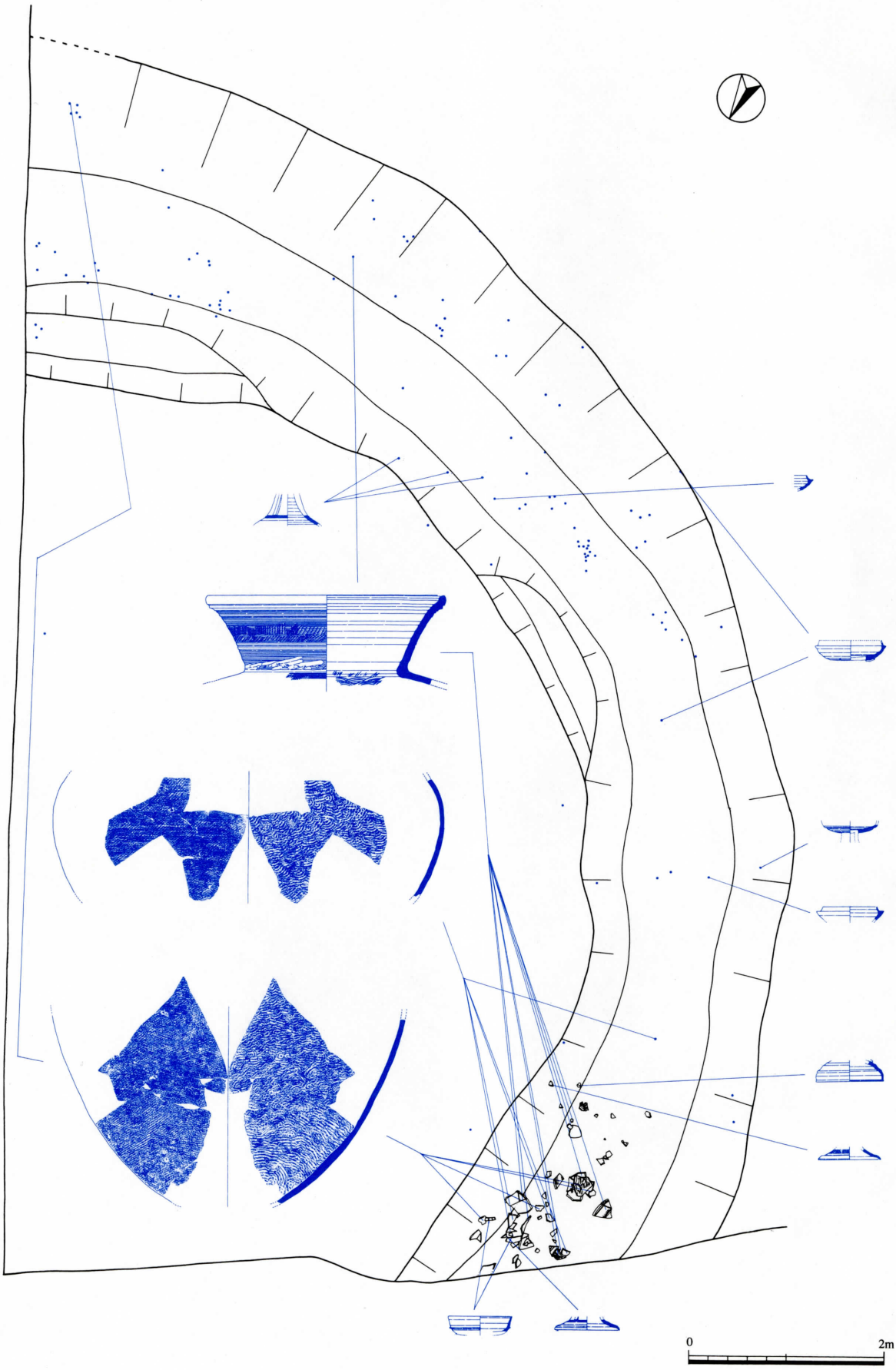
２．主体部の調査

＜主体部の状況＞

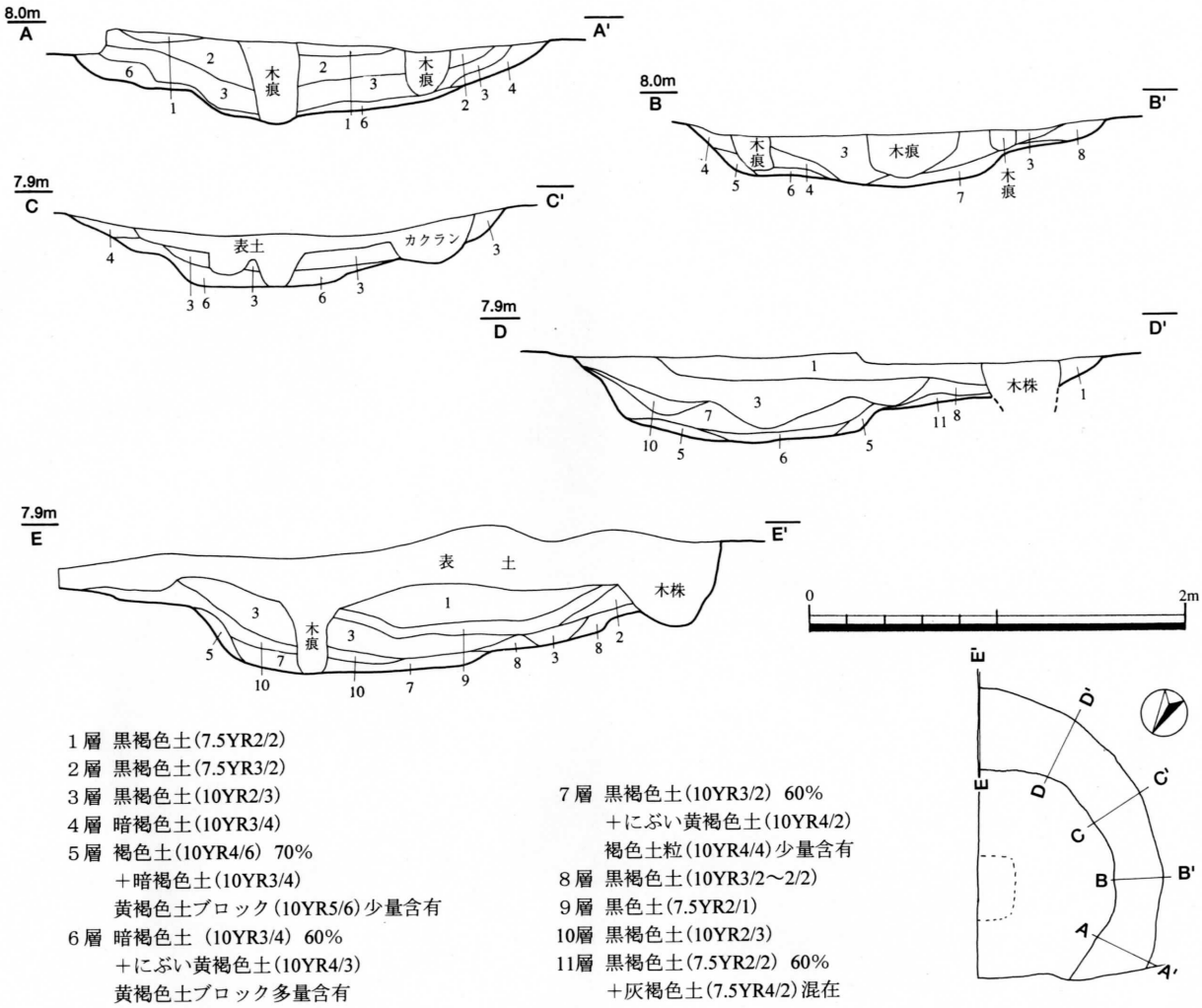
11号墳主体部は、墳丘削平により破壊されている。しかし、調査区北東端で粘土壁と思われる白色粘



第20図　借屋11号墳遺構平面・測量図（S＝1/60）



第21図　借屋11号墳遺物出土状況（S＝1/60）



第22図　借屋11号墳周構セクション図（S＝1/40）

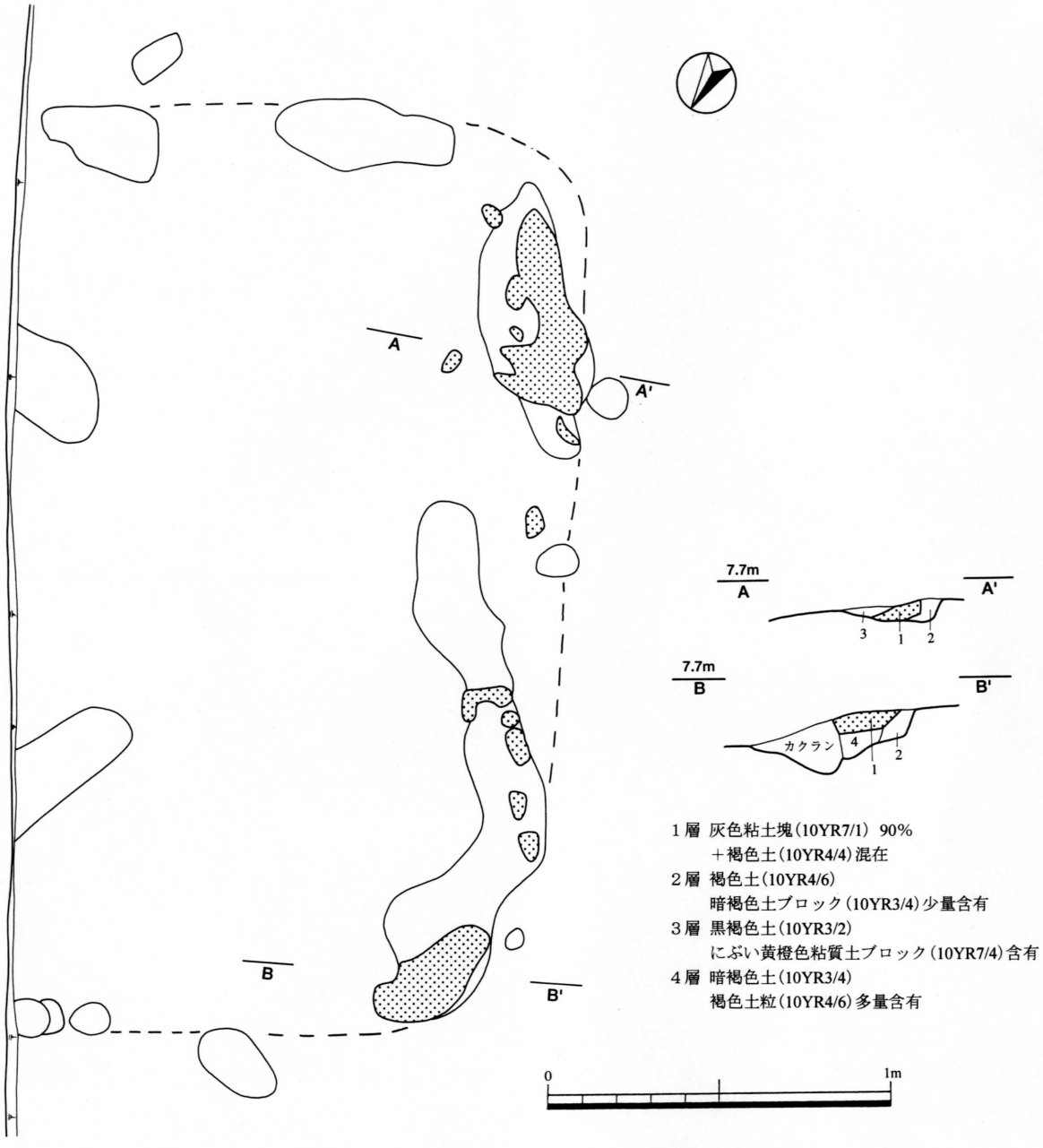
土と、粘土粒混入土、掘り方かと考えられる地山ブロック混入土を面的に捉えられたことから、位置を確認できた。主体部最下部がかろうじて残存しているといった状態である。マウンド地山面で検出した非連続的な粘土は、地山に貼り付き、一部地山に食い込んでいる状態で検出された。

＜規模・形態・位置＞

11号墳の主体部は、白色粘土の検出からやはり粘土によって壁を構築する主体部であったと考えられる。検出した白色粘土をもとは1つの粘土壁と考えると、外枠の想定線を捉えることができる。これを平面図上で破線として示した。現存粘土間で長さ約2.7mと推定される。幅は、東側が調査区外のため確認できなかったが、現存幅約1.6mであり、これ以上の幅が見込まれる。主軸は北北西軸で、中央またはやや西南よりに位置していた可能性をもつ。遺物出土は皆無である。9号墳で検出したような掘り方下の溝の検出には至らず、またピットの検出もなかった。

3．出土遺物

器種として、須恵器では、杯H蓋1点、杯H身3点、高杯5点、大甕3点が出土している。器台が2破片出土しているが、10号墳出土のものと同一個体であり、混入したものと考えられる。また、前記の杯H以外で蓋・身の識別不可能な破片が6破片6個体出土しており、天井部にケズリの見られないものがある。出土率は破片数で、甕が全体の約8割を占める。土師器は甕が3破片出土するのみである。



第23図　借屋11号墳主体部残存状況（S＝1/20）

＜須恵器＞

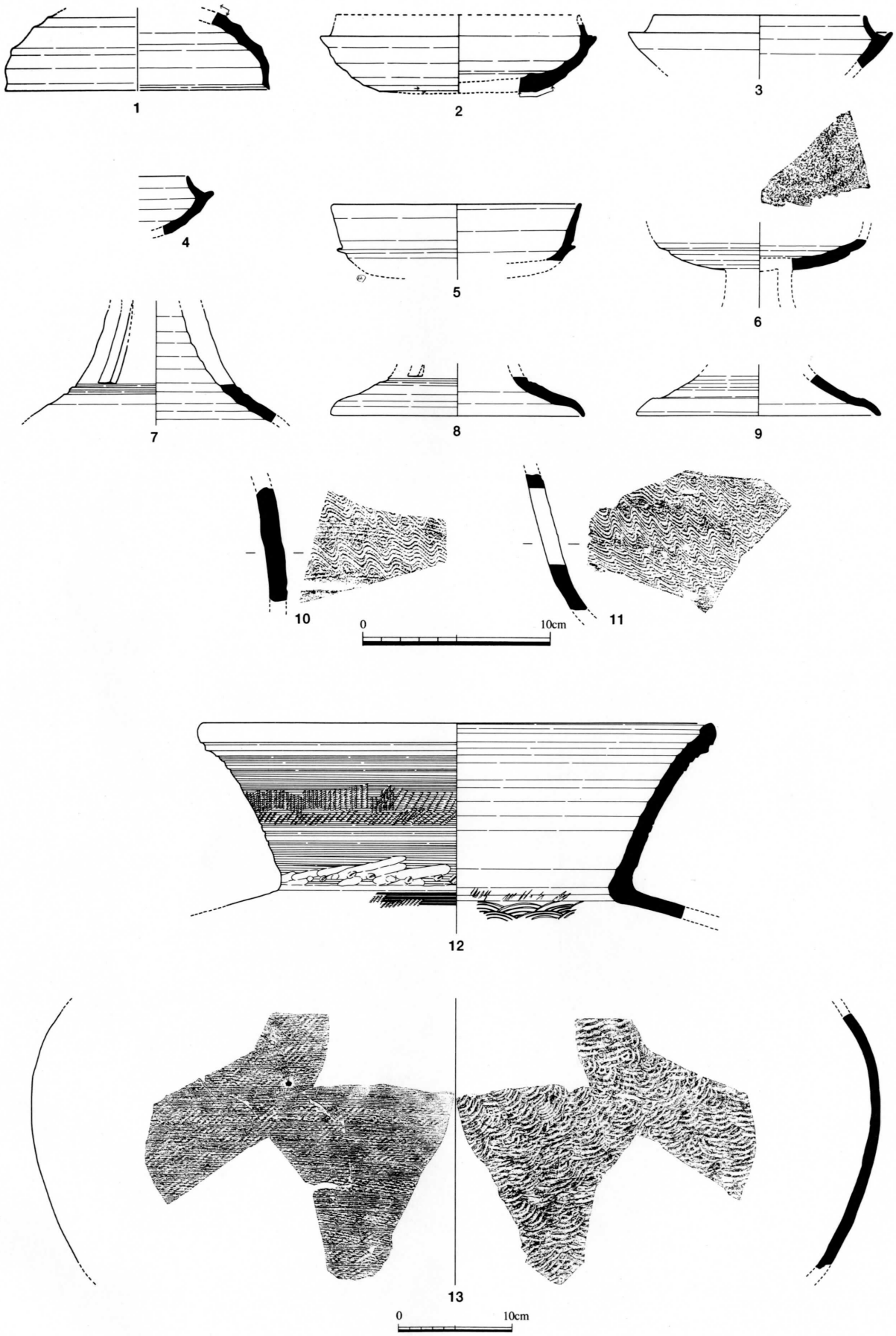
杯H蓋　（第24図１）

２点の小破片のみ出土している。１は、口径復元不可能な小破片だが、約14cmと予想される。天井部から丸みをもって口縁部に至る器形である。天井部に回転ヘラケズリがみられ、天井部と口縁部の境は不明瞭で、ロクロヒダをもつ。口縁端部は先細となって外反し、段を形成する。

杯H身　（第24図２～４）

破片数は４点、個体数で３個体に換算できる。２は、底部に回転ヘラケズリ調整をし、受け部まで丸みを持つ。体部外面にロクロヒダをもつ。３・４は、細片であり、４は若干器肉が厚い。口縁部は外反し端部は先細である。受け部は丸く小さく、受け部下のへこみはない。

高杯　（第24図５～９）



第24図　借屋11号墳出土遺物実測図（上段1/3，下段1/5）

破片数は11点出土しているが、個体数は６個体に換算できる。スカシをもつ長脚２段無蓋高杯の上段脚部片は図化していない。７以外は無蓋高杯である。５は、やや外傾し口縁端部で先細となる器形で、体部に稜をもつ杯部破片である。６は杯部の底部破片で、底部に段を形成する。７は、長脚２段３方長方形スカシの脚底部で、２段沈線上にスカシを施し、図化されていないが、裾部へ強く外反し端部が丸く折れ曲がる器形を呈す。８は、１条沈線上に長方形３方スカシをもち、端部は丸くやや長めに折れ曲がる。９は脚端部破片で、端部折り曲げ後薄く伸びる端部形態をもつ。

器台　（第24図10・11）

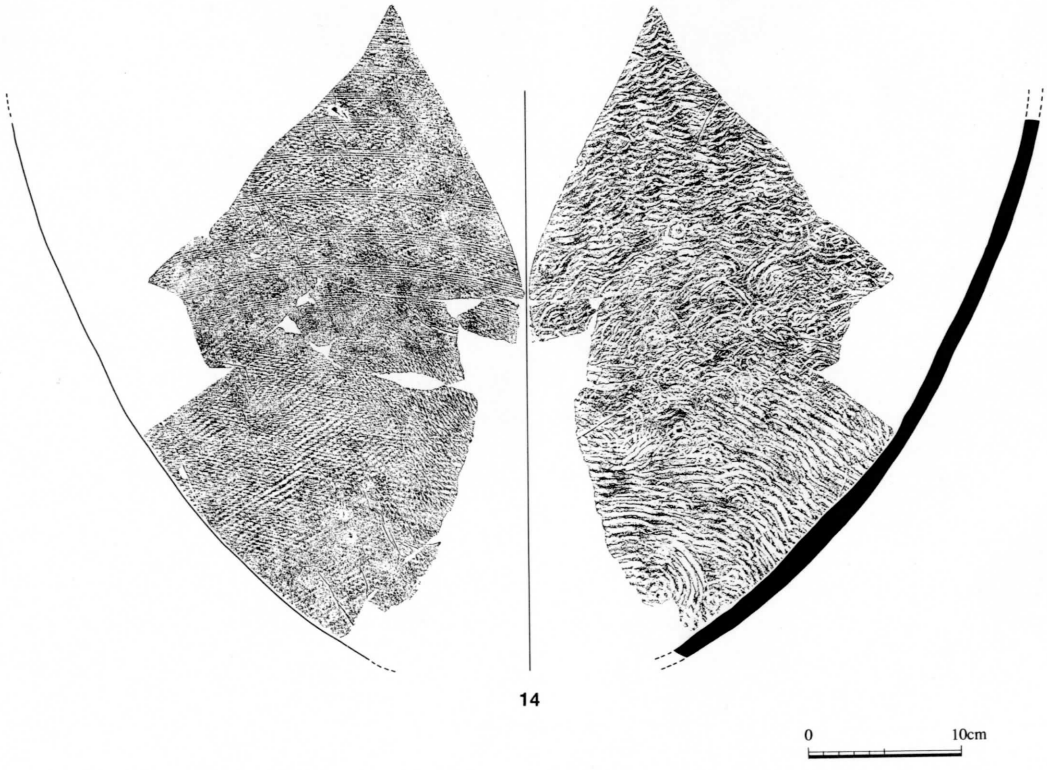
破片数は２点出土しており、10号墳出土の器台と同一個体である。10は１条沈線下に現存で９条２段の櫛描波状文を施し、11は、底部で１条沈線下に９条３段の櫛描波状文を施す。

甕　（第24･25図12～14）

確認できた破片数は132点で、このうち確認できた個体数は大甕４個体でその他は小破片である。12は、口頸部、胴部の別造り成形がみられ、粘土紐１本分の接合土を繋ぎとしており、痕跡は明瞭である。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部までそのまま開く。端部外面下に２段の稜、内面にも１段の稜を形成する。13は甕胴部、14は甕底部である。

４．借屋11号墳の築造年代

11号墳出土遺物は小破片が多く、出土地点も上層に限られるため、判断することは厳しいが、あえて述べれば、杯Ｈの口縁部が強く内傾し、受け部が小さい特徴は、南加賀古窯編年でⅥ期に属する。これは田嶋編年で古代Ⅰ$_1$期[注16]にあたり、西弘海氏の平城編年での飛鳥Ⅰ期[注17]に相当する。



第25図　借屋11号墳出土遺物実測図（1/5）

第５節　借屋12号墳の調査

１．遺構

＜古墳の状況＞

12号墳は、詳細分布調査のトレンチ４南端で確認された古墳で、トレンチ調査のため、古墳の規模・形状は不明である。しかし、人力で１ｍ掘削しても周溝底部に届かず非常に深く、古墳のくびれ部である可能性をもつ。遺物は、古墳に伴う埴輪が大量に出土した。位置は第４図の通りである。

２．出土遺物

出土遺物は、円筒埴輪と須恵器、土師器である。破片数による出土割合は、埴輪が破片数205点で82.6％、須恵器では杯Ｈの破片数は６点で2.4％、甕の破片数が34点で13.7％、器台の破片数は１点で0.4％、土師器の甕破片がが２点で0.8％である。

＜須恵器＞

杯Ｈ身　（第25図１）

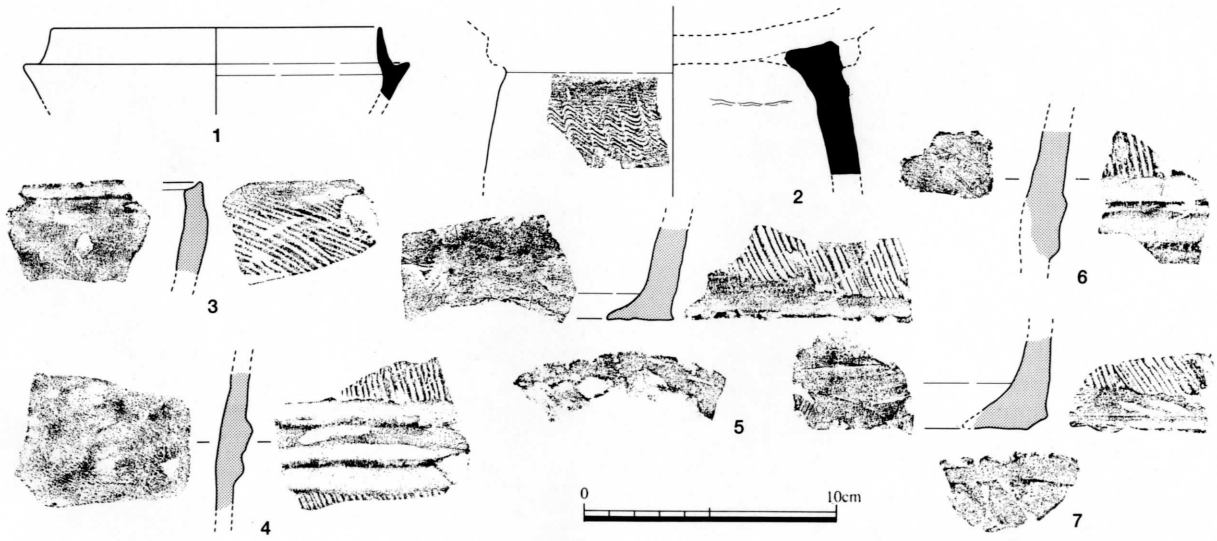
口縁部破片である。口縁部はやや直立気味に立ち端部は先細となり、受け部下のへこみがなくなる器形である。

器台　（第25図２）

10号墳出土と同一個体の、脚部破片である。断面の粘土接合痕で基部突帯部分が器受部と脚部のジョイント的役割をはたす。突帯部分の器受部接合面に接合痕がみられる。外面は下部を欠損するが８条１段以上の櫛描波状文を施すと思われる。

埴輪　（第25図３～７）

個体数は２個体に換算される。須恵質埴輪であるが、焼成が悪く生焼け状態である。３～５で同一個体、６・７で同一個体である。



第26図　借屋12号墳出土遺物実測図（1/3）

第6節　まとめ

今回調査された古墳についてまとめると、以下の２点が特徴として挙げられる。

① ９・11号墳は小円墳で、粘土が主体部築造に用いられており、10・12号墳は前方後円墳の可能性がある。

② 周溝内遺物では、10・11号墳は須恵器中心で埴輪を伴わない。これに対し９・12号墳は埴輪中心である。９号墳のものは、矢田野エジリ古墳出土埴輪と類似する。

周溝のみの検出という形で、新たに借屋古墳群に連続する古墳群を確認することができた。この結果は、旧地形をとどめない月津台地内の周知外の古墳、または消滅とされている古墳においても、周溝のみの確認が可能ととらえられる。そして、周溝遺存遺物が10号墳のように良好な場合もある。

本報告にあたり、筆者が勉強不足であり、資料提示にとどまったが、さらなる検討が必要と考える。今回の調査結果が今後の研究の一助となれば幸いである。

注釈

（１）小松市教育委員会 1988『念仏林遺跡発掘調査報告書』
（２）小松市教育委員会 1995『念仏林南Ⅱ』
（３）小松市教育委員会 1999『額見町遺跡（額見町遺跡Ｂ地区）串・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告-1-』
（４）石川県埋蔵文化財センター 1998『石川県立埋蔵文化財センター年報』第19号
（５）石川県小松市教育委員会 1999『林タカヤマ窯跡-小松ドーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
（６）小松市教育委員会 1992『矢田野エジリ古墳』
（７）石川県考古研究会・小松市社会科研究会 1952「符津石山調査報告」『石川考古学研究会誌』第４号 石川考古学協会
（８）小松高校地歴クラブ考古学研究班 1951「江沼郡月津村矢田借屋古墳調査報告」『研究報告』第３輯 石川県考古学研究会
（９）小松高校地歴グラブ 1956『石川県小松市矢田町所在矢田借屋７号古墳調査報告』
小松高校地歴クラブ 1962「借屋８号墳発掘調査」『石川県高等学校文化連盟郷土部会報』２号
（10）田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店、中村浩 1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』
大阪府教育委員会に定義される杯を示す。
（11）これは、木造粘土被覆室（河村1997）、南加賀型木芯粘土室（樫田1989）、箱形粘土棺（上野1952）に定義される主体部と同類のものである。
（12）樫田　誠氏ご教示による。
（13）望月精司 1990「南加賀古窯跡群成立期の様相」『二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』 小松市教育委員会　後述する編年はこれを示す。
（14）田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店　後述する編年はこれを示す。
（15）望月精司氏ご教示による。
（16）田嶋明人 1988「古代編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会・石川考古学研究会
（17）西　弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

引用・参考文献

石川県 1977「第１分冊 地形地質」『石川県の自然環境』
石川考古学研究会 1996『石川県考古資料調査・集成事業報告書　武器・武具・馬具』
石川県埋蔵文化財保存協会 1998『八幡遺跡Ⅰ』
上野与一 1965「第二篇・考古篇」『小松市史』第４巻
小松市教育委員会 1989『後山無常堂古墳・後山明神３号墳』
小松市教育委員会 1999『林タカヤマ窯跡』
小松市教育委員会 1992『矢田野エジリ古墳』
田嶋明人 1988「漆町遺跡の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
寺井町教育委員会 1997『加賀能美古墳群』
雄山閣 1998『古墳時代の研究６　土師器と須恵器』

借屋９号墳周溝遺物観察表

番号	種　別	機　種	法　量	胎　土	焼成	色　調	完存	成　形・調　整	備　考
8	須恵器	杯Ｈ身	口 13.1　受 15.5 立 1.4	南加賀	良好	青灰色	1/5	底部外面回転ヘラケズリ。	正位焼。
9	須恵器	短頸壺	頸 8.2　胴 16.3	南加賀	良好	暗灰色	破片		正位焼。
10	須恵器	提　瓶	口 9.2　器 23.0 頸 4.8　頸高 2.8 胴 21.1　胴高 20.3 胴厚10.6	南加賀	良	灰色	口縁1/3 胴部1/6 欠	閉塞側面内面シボリ痕。中央より上で指ナデ＋指突痕。 底部側面内面・カキ目→指ナデツケ。底部たちあがりで指ナデツケ→閉塞側面側への粘土つみ上げ跡そのまま残る。 外面ヘラ切り→指ナデツケ。たちあがりで指ナデ。	口縁歪み。口頸部中軸ズレ。 正横倒し焼。外面「×」ヘラ記号。
11	須恵器	大　甕		南加賀	良好	頸部灰色 暗灰色	頸部片	内面指ナデ部分，接合土？内面Ｄａ当て具，指ナデ部分の粘土かぶる。外面指ナデ，沈線上櫛描波状文。	
12	須恵器	甕		南加賀	良	灰色	口縁破片	外面，口縁外端部に櫛描波状文。	
13	須恵器	大　甕	頸30.4	南加賀	良	暗紫灰色 頸部灰色	口頸部片	口頸部別造り。内面指ナデ部分は補強土。 口頸部外面・カキ目→櫛描波状文→沈線。胴部外面Ｈａタタキ。内面Ｄａ当て具。接合後頸部内外面指ナデ→胴部最上内外面当て具，タタキに粘土かぶる。口頸部外面・カキ目消される。	正位焼。
14	須恵器	大　甕	頸30.0	南加賀	良好	灰色	口頸部片	口頸部別造りと考えられるが，接合土はわからない。 胴部外面Ｈａタタキ，内面Ｄａ当て具。口頸部外面・カキ目→沈線→櫛描波状文。内面当て具。接合後頸部内外面指ナデ。頸部内面当て具消され，胴部最上当て具粘土少しかぶり，外面タタキ・カキ目消される。	
15	土師器	甕		小松南部在地	良	浅黄褐色	口縁破片	外面ヨコハケ→指ナデ消し。	
16	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	口縁破片	内面指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。透孔。
17	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	口縁破片	内面指ナナメハケ。外面タテハケ→口縁部ナナメハケ。	須恵質。
18	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	口縁破片	内面指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。
19	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	破片	内面指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。透孔。
20	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	破片	内面指ヨコナデ。	須恵質。
21	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	破片	内面指タテナデ。外面タテハケ。	須恵質。透孔。
22	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	破片	内面指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。透孔。
23	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	底部破片	内面指タテナデ。外面タテハケ。	須恵質。
24	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	底部破片	内面指タテナデ。外面タテハケ。	須恵質。
25	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	底部破片	内面指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。
26	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	破片	内面上部Ｄａ当て具。指ヨコナデ→上部指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。
27	埴　輪	円　筒		南加賀在地	良好	灰褐色	破片	内面下部にＤａ当て具。→指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。透孔。
28	埴　輪	円　筒		南加賀在地	生焼け	橙色	破片	内面指ナナメナデ。外面タテハケ。	須恵質。
29	埴　輪	円　筒		南加賀在地	生焼け	褐色	破片	内面ヨコナデ？外面タテハケ。	須恵質。

借屋10号墳周溝遺物観察表

番号	種　別	機　種	法　量	胎　土	焼成	色　調	完存	成　形・調　整	備　考
1	須恵器	杯Ｈ蓋	口 14.3　器 4.6	南加賀	良好	暗灰色 (外)	完形	天井部外面回転ヘラケズリ。内面１本指ナデ，幅広工具ナデ。	逆位焼又は蓋との重焼き？ ２とセット。
2	須恵器	杯Ｈ身	口 12.3　器 5.5 受 14.8　立 1.8	南加賀	良好	暗灰色 (外)	完形	底部外面回転ヘラケズリ。底部内面１本指ナデマワシ。	1とセットで逆位焼。
3	須恵器	杯Ｈ蓋	口 14.5　器 4.7	南加賀	良好	暗紫灰色	2/3	天井部外面回転ヘラケズリ。	逆位焼。
4	須恵器	杯Ｈ蓋	口 14.6　器 4.7	南加賀	生焼け	灰白色	1/2	天井部外面回転ヘラケズリ。内面１本指ナデ回し。	正位焼？
5	須恵器	杯Ｈ身	口 12.3　器 5.6 受 15.0　立 1.8	南加賀	良好	暗灰色 (外)	完形	底部内面多方向指ナデ。外面回転ヘラケズリ。	逆位焼。
6	須恵器	杯Ｈ身	口 12.4？受 15.3？ 立 1.7	南加賀	良	青灰色	破片		
7	須恵器	杯Ｈ身	受 13.5	南加賀	良	暗灰色	1/3	底部回転ヘラケズリ。底部内面幅広工具ナデツケ。	逆位焼。
8	須恵器	杯Ｈ身	口 13.5　器 4.2 受 15.9　立 1.4	南加賀	生焼け	明灰色	3/4	底部外面手持ちヘラケズリ。底部内面１本指ナデ。	
9	須恵器	無蓋高杯	口 11.1　器 12.9 脚 10.0　脚高 8.4 基 3.6　杯 4.5	南加賀	良好	青灰色	1/2	杯部外面　底部・カキ目→回転ケズリ。杯部内面底部１本指ナデツケ。脚部内面シボリ痕。	長方形１段３方スカシ。 正位焼。
10	須恵器	無蓋高杯	脚 8.6　脚高 8.1 基 2.9	南加賀	良好	暗灰色	脚3/4	脚部外面・カキ目→指ナデ。内面シボリ痕。	円孔径1.1の３方スカシ， １つズレ。横倒し焼。
11	須恵器	樽形瓶	口 10.6　器 13.9 頸 3.2　頸高 4.8 胴高 9.1　円 1.8	南加賀？	良好	灰褐色	5/6	口頸部稜線形成後，上下に櫛描波状文。胴部２条沈線区画内に櫛描波状文。胴部中央円孔。	正位焼。
12	須恵器	小型壺	頸 6.7　胴 13.3	南加賀	良好	灰色	2/3	外面底部回転ヘラケズリ。内面底部ツキ出し痕。	
13	須恵器	提　瓶	口 5.9	南加賀	良好	暗灰色	口縁1/3		
14	須恵器	提　瓶	胴 26.3　胴高 25.5	南加賀	良好	暗紫灰色	口頸欠 胴1/3欠	閉塞側面外面・カキ目→閉塞→Ｈｂタタキ→手持ちケズリ。 底部側面内面・カキ目→指ナデ。外面・左回転カキ目。	正位焼。底部に置台痕。 閉塞側面内面に指圧痕有。 胴部歪み。
15	須恵器	横　瓶	口 11.6	南加賀	良好	暗灰色	口縁1/4		
16	須恵器	器　台	基 14.6	南加賀	良好	暗灰色	破片	基部上面に，Ｄａ当て具。	
17	須恵器	器　台		南加賀	良好	暗灰色	破片		２ヶ所に三角スカシ。
18	須恵器	器　台		南加賀	良好	暗灰色	破片		三角スカシ。
19	須恵器	器　台		南加賀	良好	暗灰色	破片		
20	須恵器	器　台		南加賀	良好	暗灰色	破片		三角スカシ。
21	須恵器	器　台		南加賀	良好	暗灰色	脚底部 破片	沈線・隆帯区画内に櫛描波状文。	三角スカシ。
22	須恵器	器　台		南加賀	良好	暗紫灰色	破片		三角スカシ。
23	須恵器	小　甕	頸 12.1　胴 28.8 胴高 22.3	南加賀	良好	青灰色	口縁欠	外面胴部Ｈａタタキ→カキ目、底部Ｈａタタキ出し。 口頸部，櫛描波状文→沈線→頸部指ナデ。内面胴部Da当て具。頸部指ナデにより，胴最上当て具消される。	横倒し焼き。胴部ワラ痕。 火ダスキ痕。
24	須恵器	小　甕	口 21.5	南加賀	堅緻	暗紫灰色	口縁1/3	外面・カキ目→２条の稜線→稜線区画内に櫛描波状文。	歪み。
25	須恵器	中　甕	口 22.6　器 53.5 頸 16.6　頸高 4.7 胴 50.5　胴高 48.5	南加賀	堅緻	暗灰色	2/3	外面胴部Ｈａタタキ→カキ目　胴下Ｈａタタキ出し。口頸部カキ目。内面胴部Ｄａ当て具。頸部指ナデにより，当て具消される。	正位焼。強い歪み。 底部５ヶ所に置台痕。 火ダスキ痕。
26	須恵器	中　甕		南加賀	堅緻	暗灰色	口縁破片	外面・カキ目→回転ロクロナデ→２条沈線区画内に、櫛描波状文。	正位焼。歪み。
27	須恵器	大　甕	口 47.0　頸 32.4 頸高 18.0　胴 89.0	南加賀	良好	暗紫灰色	1/3	口頸部別造り接合。指ナデは上下のつなぎ部分。口頸部，外面・カキ目→２条１対の沈線区画内に櫛描波状文。胴部内面Ｄａ当て具。外面Ｈａタタキ。接合後頸部内外面指ナデ，外面・カキ目消され内面当て具粘土かぶる。	胴部上４ヶ所に径7.5㎝の 重焼き痕。

借屋11号墳周溝遺物観察表

番号	種　別	機　種	法　量	胎　土	焼成	色　調	完存	成　形・調　整	備　考
1	須恵器	杯Ｈ蓋	口 14.0？	南加賀	良好	灰褐色	破片	外面天井部回転ヘラケズリ。	
2	須恵器	杯Ｈ身	受 14.8	南加賀	良好	灰色	破片	底部外面回転ヘラケズリ。	逆位焼。
3	須恵器	杯Ｈ身	口 11.3　受 14.1 立 1.1	南加賀南群？	生焼け	灰白色	破片		
4	須恵器	杯Ｈ身	立 1.2	南加賀南群？	良	灰色	破片		逆位焼。
5	須恵器	無蓋高杯	口 13.3	南加賀	良好	灰色	杯部片		
6	須恵器	無蓋高杯	基 3.6	南加賀	良好	灰色	杯部破片		杯部内面櫛ナデ痕。
7	須恵器	高　杯		南加賀南群？	良好	灰色	脚1/4		２段長方形３方スカシ。 逆位焼。
8	須恵器	無蓋高杯	脚 13.4	南加賀	良好	灰色	脚破片		長方形１段３方スカシ。
9	須恵器	無蓋高杯	脚 13.0	南加賀	良好	灰褐色	脚破片		
10	須恵器	器　台		南加賀	良好	暗灰色	破片		
11	須恵器	器　台		南加賀	良好	灰褐色	底部破片		三角スカシ。
12	須恵器	大　甕	口 50.0　頸 31.6 頸高 15.1	南加賀南群？	良好	灰色	口縁2/3	口頸部別造り接合。胴部内面Ｄａ当て具。外面タタキ（種類不明）→カキ目。口頸部外面カキ目→沈線→連続刺突文。頸部外面，接合の指ナデ→指オサエ。内面ミガキ状ナデ。	正位焼。
13	須恵器	大　甕	胴 74.8	南加賀南群？	良好	灰色	胴部片	外面Ｈｂタタキ→カキ目。内面Ｄａ当て具。	
14	須恵器	大　甕		南加賀	良好	灰色	底部片	内面Ｄａ当て具。外面胴部Ｈｂタタキ→カキ目→底部Ｈｂタタキ出し。	置台痕。火ダスキ痕。

借屋12号墳周溝遺物観察表

番号	種　別	機　種	法　量	胎　土	焼成	色　調	完存	成　形・調　整	備　考
1	須恵器	杯Ｈ蓋	口 13.0　受 15.2 立 1.5	南加賀	良好	灰色	破片		
2	須恵器	器　台	基 14.6	南加賀	良好	暗灰色	破片	カキ目→櫛描波状文。	
3	埴　輪	円　筒		南加賀在地	生焼け	橙色	口縁破片	外面ナナメハケ。	須恵質。
4	埴　輪	円　筒		南加賀在地	生焼け	橙色	破片	外面ナナメハケ。	須恵質。
5	埴　輪	円　筒		南加賀在地	生焼け	橙色	底部破片	外面ナナメハケ。	須恵質。
6	埴　輪	円　筒		南加賀在地	生焼け	黄橙色	破片	外面ナナメハケ。	須恵質。
7	埴　輪	円　筒		南加賀在地	生焼け	黄橙色	底部破片	底面端部にケズリ。外面ナナメハケ。	須恵質。

凡例（出土遺物観察表）

・計測値の単位は全てcmであるが、省略してある。

・法量において、「口」＝口径 、「受」＝受部径、「立」＝立ち上がり高、「頸」＝頸部径、「器」＝器高、「頸高」＝頸部高、「胴」＝胴部最大径、「胴高」＝胴部高、「胴厚」＝胴部厚、「脚」＝脚径、「基」＝脚基部径、「杯」＝杯部口径、「円」＝円孔径として省略してある。

・胎土について、本墳の出土遺物胎土は、細かな砂を多く含み小石等が混じるのが特徴である。この胎土は、小松市南部丘陵地に所在する南加賀古窯跡群産須恵器の特徴である。なお、須恵器・土師　器の鑑定は望月精司氏によって行われており、埴輪の鑑定は樫田誠氏によって行われている。

・焼成で示す用語は、「堅緻」＝焼きしまりすぎているもの、「良好」＝焼成が良好な還元状態のもの、「良」＝良好よりもやや焼きしまりが弱いもの、「生焼け」＝焼成不良で軟質なもの、白い還元状態のものをそれぞれ示す。

・完存は、全体での完存割合をしめすが、部位の記述がある場合は、その部位での完存割合を示す。

・色調は、断面色調を基準としているが、完形の杯に関しては外面色調を示す。

・成形・調整での「当て具」「タタキ」は、当て具痕、タタキ痕を示し、分類名（花塚1984）は、当て具の「Ｄａ」＝同心円文に木目のみられないもの、タタキの「Ｈａ」＝木目直行の平行線文、「Ｈｂ」＝木目が左下がりに斜交する平行線文を示す。

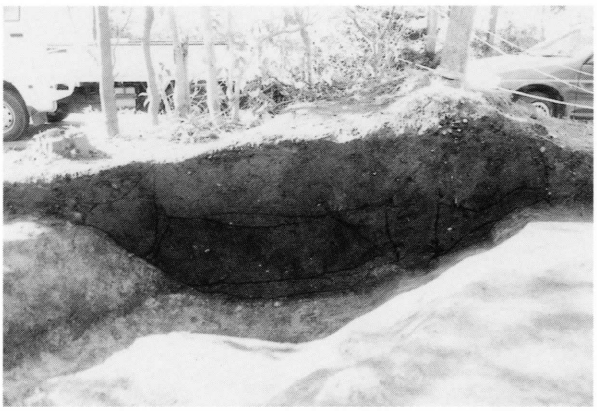
・成形・調整での「→」は、段階をしめす。

・備考で示した○○焼は、正位焼が口が上に来る使用状態の正位での窯詰めを、逆位焼は口が下に来る逆位状態での窯詰めを、横倒し焼は横に倒した状態での窯詰めを、正横倒し焼は横倒し状態だが成形段階で上にくる状態の窯詰めをそれぞれ示す。

調査前（南より）

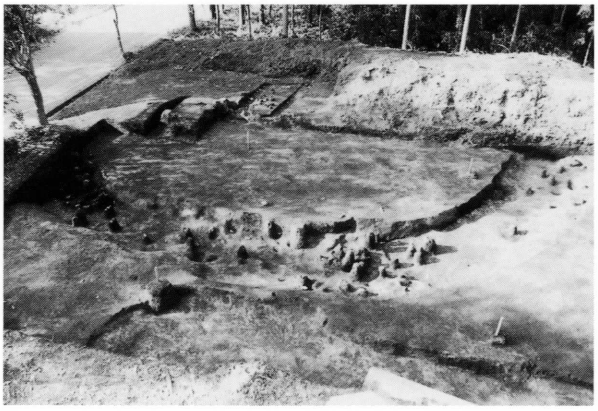
A区調査前（東より）

9号墳周溝プラン



9号墳周溝Dラインセクション

9号墳周溝Cラインセクション



9号墳遺物出土状況

9号墳周溝完掘全景

9号墳主体部刀子出土状況

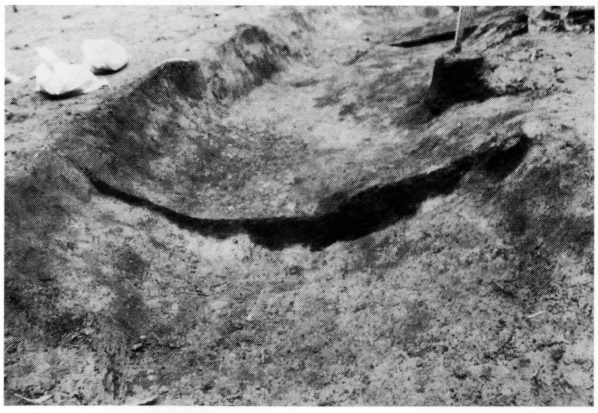
9号墳主体部完掘全景（南より）

9号墳主体部掘り方セクション

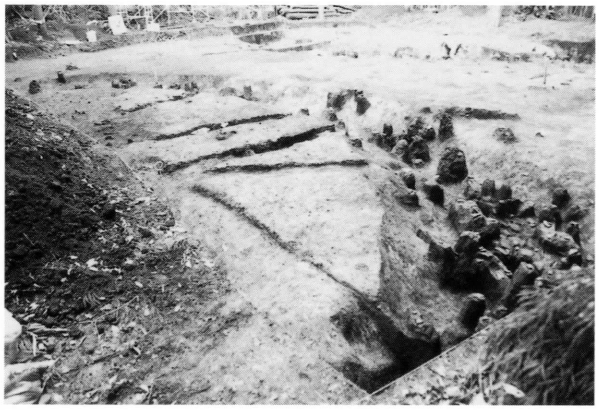
B区調査前（南より）

10号墳Cラインセクション

10号墳Dラインセクション



10号墳Dライン掘り方セクション

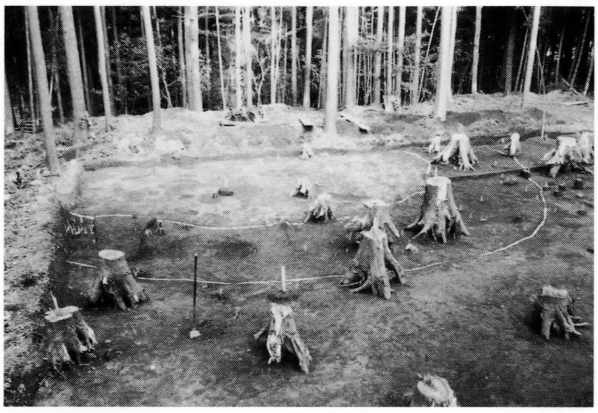


10号墳遺物出土状況

10号墳遺物出土状況

10号墳杯H出土状況

10号墳完掘全景



11号墳周溝プラン

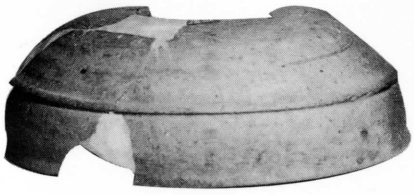
11号墳遺物出土状況

11号墳Eラインセクション

11号墳完掘全景

11号墳遺物出土状況

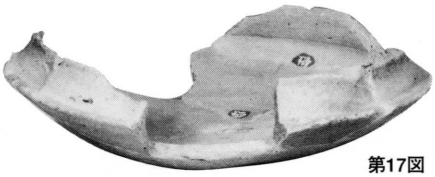
第17図　1



第17図　3

第17図　2

第17図　5



第17図　8

第17図　4

第17図　9

第17図　10

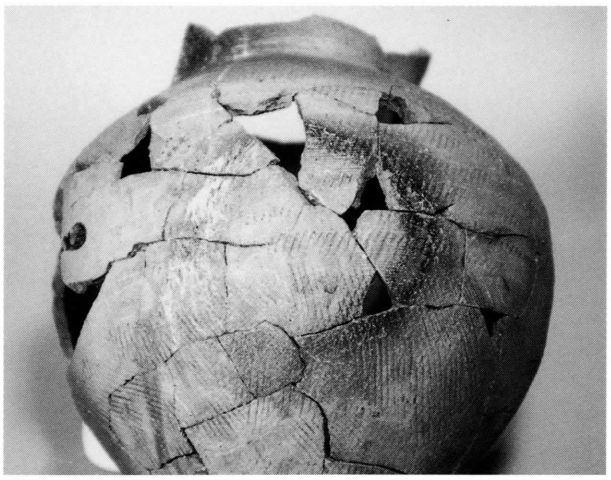
第17図　11

第17図　12

第18図　24

第17図　14

第18図　23



23　ワラ痕

第19図　25

第19図　27

25　置台痕

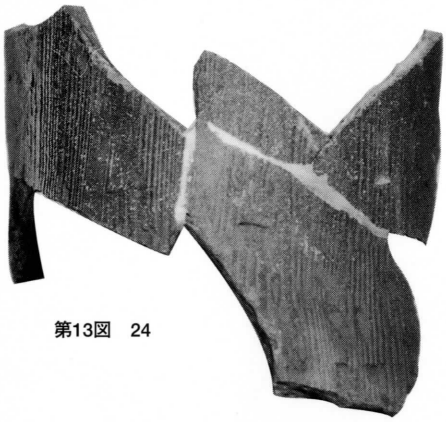
27　粘土紐痕

27　重焼き痕

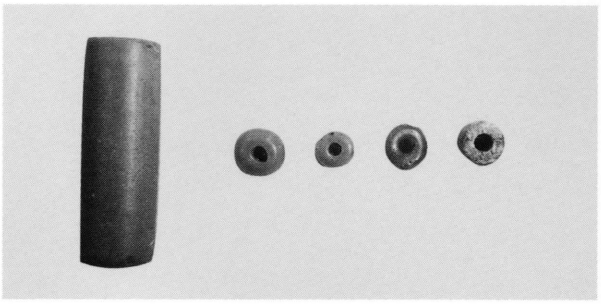
第13図　21

第11図　1

第11図　2



第13図　24

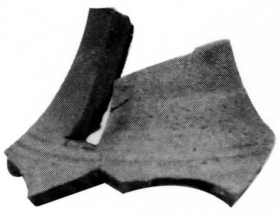


第11図　3〜7

第12・13図　埴輪

第12図　10

第24図　12



第24図　7

報告書抄録

ふりがな	やたかりやこふんぐん
書名	矢田借屋古墳群
副書名	個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宮下幸夫　福海貴子　大橋由美子
編集機関	小松市教育委員会
所在地	〒923-8650　石川県小松市小馬出町91　☎0761-22-4111
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
矢田借屋 古墳群	石川県 小松市月津町 ト17(外19筆)		03103	26° 20′ 41″	136° 22′ 10″	試掘調査 1998.3.2～3.6 発掘調査 1998.10.13～ 1999.1.28	試掘調査 2,474m² 発掘調査 350m²	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田借屋 古墳群	古墳	古墳時代後期 (6世紀初頭～ 古代初頭)	古墳4基 (2基は円墳 と推定)	刀子　鉄鏃 玉類 須恵器　土師器 埴輪	古墳周溝1／3を検出。 粘土室主体部を伴う。

矢田借屋古墳群

－個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2000年３月31日　発行

発行　小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91
☎ 0761-22-4111

印刷　金　子　印　刷